

2022 年度 3 月修了 修士論文

現代サッカーにおいて役割の変化した GK の新たな育成方法

New Training Methods for Goalkeeper Based on the Changing Tasks
in Contemporary Football

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5022 A 308-6

川口 能活

研究指導教員： 平田竹男教授

目次

第1章 背景.....	1
第1節 ルール変更	1
第1項 バックパスのルール変更.....	1
第2項 ゴールキックのルールの変更.....	2
第2節 現代サッカーの戦術	3
第1項 ポゼッションサッカー	3
第2項 ハイプレス	3
第3項 PK ストップの技術	4
第3節 本研究の問題意識.....	6
第4節 先行研究.....	6
第5節 目的.....	7
第2章 方法.....	8
第1節 事例の収集	8
第1項 インタビュー調査（クラブ関係者）	8
第2項 インタビュー調査(元選手).....	8
第3項 インタビュー内容の分析方法.....	9
第4項 文献調査	9
第5項 筆者の経験.....	9
第6項 倫理的配慮.....	10
第2節 本研究の構成.....	10
第3章 結果1 日本における GK 育成の現状	11
第1節 これまでの JFA の育成方針	11
第2節 J リーグ登録 GK のパスウェイ	13
第3節 高体連と J クラブの GK の状況	16
第1項 クラブユースの GK の特徴	16
第2項 高校総体における GK の特徴.....	17
第3項 U18 年代の GK の現状.....	18
第4節 J クラブ下部組織の現状（FC 東京）	21
第1項 スカウティングについて.....	21
第2項 ジュニアユース・ユース年代の GK 育成について	21
第5節 まとめ	24
第4章 結果2 ブラジルにおける GK 指導.....	25
第1節 サントス FC の事例.....	25
第1項 スカウティングについて.....	25

第2項	ブラジルの GK の現状と戦術的進歩について	26
第3項	指導法の変化について	28
第4項	ブラジルの GK 育成環境について	29
第5項	GK の捉え方とトレーニングについて	29
第6項	戦術的ピリオダイゼーション理論について	32
第2節	アトレチコ・ミネイロの事例	34
第1項	スカウティングについて	34
第2項	GK トレーニングの進化について	34
第3項	戦術的変更への対応	38
第4項	GK エヴェルソン選手のスタッツ	40
第5項	アトレチコ・ミネイロの攻撃的な技術を高めるトレーニング内容	42
第3節	本章のまとめ	43
第5章	結果3 欧州トップクラブにおける GK の指導	45
第1節	ヨーロッパのトップクラブの GK 指導	45
第2節	本章のまとめ	52
第6章	結果4 アルゼンチンにおける GK の指導	53
第1節	アルゼンチンの GK の育成環境とフィジョール氏の育成年代の経験	53
第2節	アルゼンチンの GK 育成内容	54
第3節	1978 年 W 杯アルゼンチン大会での優勝の経験	57
第4節	本章まとめ	58
第7章	結果5 筆者の PK 戦の経験	59
第1節	国際大会における PK の重要性	59
第2節	2004 年アジア杯ヨルダン戦	59
第3節	2006 年 W 杯クロアチア戦	60
第4節	2007 年アジア杯オーストラリア戦	61
第5節	2021 年オリンピック東京大会	61
第6節	本章まとめ	62
第1項	技術・フィジカル	62
第2項	メンタル	62
第3項	一発勝負の PK 戦を経験させる試み	64
第8章	総合考察 新たなトレーニングモデルの提案	65
第1節	GK 育成・指導のポイント	66
第2節	新たな練習内容の提案1	67
第1項	練習のスケジュール(曜日別)	67
第2項	GK 専用練習(火曜日)	67
第3項	全体練習と GK 専用練習(水曜日)	69

第3節	本練習メニューの実施対象.....	71
第4節	ジュニア年代の取り組み	71
第5節	本研究の限界.....	71
第9章	結論.....	72
参考文献		74
謝辞	73	

図表目次

表1	2010年W杯決勝、オランダ対スペインのGKのパフォーマンスの比較 出典：FIFA, <i>Goalkeeping</i> , 出版年不明, P.226.....	2
表2	W杯におけるPK戦の回数と結果.....	5
表3	Jリーグ登録GKの平均身長と平均年齢 出典：JFA	13
表4	Jリーグ選手の2種、3種の出身区分（JアカデミーはJクラブのアカデミー）出典：JFA.....	14
表5	Jリーグ選手の3種から2種への経路 出典：JFA.....	14
表6	Jリーグ選手の2種後の経路 出典：JFA.....	15
表7	クラブユースの攻撃のデータ 出典：JFA	18
表8	高体連・高校総体の攻撃のデータ 出典：JFA	19
表9	ジュニアユース・ユース年代のGK育成に関する山下氏の発言1	21
表10	ジュニアユース・ユース年代のGK育成に関する山下氏の発言2.....	22
表11	ジュニアユース・ユース年代のGK育成に関する山下氏の発言3.....	22
表12	ジュニアユース・ユース年代のGK育成に関する山下氏の発言4.....	23
表13	サントスFCマウロ氏のスカウティングに関する発言内容	26
表14	サントスFCマウロ氏のブラジルのGKの現状と戦術的進歩に関する発言内容	27
表15	サントスFCマウロ氏の指導法の変化に関する発言内容.....	28
表16	サントスFCファビオ氏のブラジルのGK育成環境に関する発言内容.....	29
表17	サントスFCファビオ氏のGKの捉え方とトレーニングについての発言内容	30
表18	アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏のスカウティングについての発言内容 ..34	
表19	アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏のGKトレーニングの進化についての発言内容.....	37
表20	アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏の戦術的変更への対応についての発言内容.....	39
表21	アトレチコ・ミネイロの国内リーグの成績	41

表 22	ガルシア氏の発言内容 1	45
表 23	ガルシア氏の発言内容 2	47
表 24	ガルシア氏の発言内容 3	49
表 25	ガルシア氏の発言内容 4.....	50
表 26	ガルシア氏の発言内容 5.....	51
表 27	フィジョール氏の発言内容 1.....	53
表 28	フィジョール氏の発言内容 3.....	56
表 29	フィジョール氏の発言内容 2.....	57
表 30	練習のスケジュール(曜日別).....	67
表 31	GK 専用練習メニュー(火曜日).....	68
表 32	GK 専用練習と全体練習のメニュー(水曜日).....	69
図 1	1990 年 W 杯決勝と 2010 年 W 杯決勝の比較 出典：Power2014,p.197	1
図 2	サントス FC マウロ氏へのインタビューの様子	25
図 3	サントス FC ファビオ氏（右）へのインタビューの様子	25
図 4	アトレチコ・ミネイロ ダニエル氏（左）へのインタビューの様子.....	34
図 5	連続のシュートストップの様子(1).....	35
図 6	連続のシュートストップの様子(2).....	35
図 7	1 対 1 の対応のトレーニングの様子	35
図 8	シュートストップからのバストレーニングの様子(1).....	36
図 9	シュートストップからのバストレーニングの様子(2).....	36
図 10	サンパオリ氏とプレーしたエヴェルソン選手の攻撃のスタッツ（Infogol より 筆者作成）	40
図 11	エヴェルソン選手の攻撃での貢献（Infogol より筆者作成）	41
図 12	DF ラインの背後をカバーするブレイクアウェイのトレーニングの様子	42
図 13	GK のポジショントレーニングの様子	43
図 14	JFA 作成の Japan's Way－GK に求められる選手像.....	65
図 15	GK を含めた 8 対 7 のビルドアップのトレーニング	70
図 16	5 対 5 のシュートゲーム	70

第1章 背景

第1節 ルール変更

第1項 バックパスのルール変更

一般的にサッカーのゴールキーパー(以下、GK)はシュートを止めているシーンやクロスボールをキャッチ、又は手で弾くシーンなどが最初に思い浮かぶが、現代サッカーではGKがボールを足で処理する回数が非常に多くなっていることが明らかになっている。これは、1992年に導入された通称「バックパス・ルール」が大きく関与している。バックパス・ルールとは、味方選手からの意図的なバックパスをGKがペナルティエリア内で、手で処理する(ボールを手でキャッチする)ことが反則とみなされるルールであり、その場で間接フリーキックのジャッジが下される。1992年以前は、味方の意図的なバックパスをGKがキャッチすることは可能であった。このルール変更の背景には、1990年イタリアで開催されたW杯グループステージにおいて、最終節で他会場の試合状況を確認したチームが、グループステージ突破に必要なポイント(勝ち点)を獲得するため、当時GKはバックパスをキャッチできたため、味方のディフェンダー(以下、DF)からGKがキャッチをして時間稼ぎとなる行為を行った。そして、試合を観戦に訪れたサポーターが、試合終了の笛を待たずに会場を去ってしまう出来事があった。このような行為は、サッカーの技術、戦術、判断力の総合的なスキルアップの妨げと、サッカーファン離れという深刻な事態を招く恐れがあるとの判断から、ルールが変更されバックパス・ルールが導入された。

バックパス・ルールの導入によって、時間稼ぎの防止だけでなくGKのプレーの仕方にも影響を与えた。図1は1990年W杯決勝と2010年W杯決勝のルール変更前後の比較である。1990年W杯決勝では手を使ったプレーよりも足を使ったプレーの割合が高いが、2010年W杯の決勝では足を使った割合の方が高くなっていた。

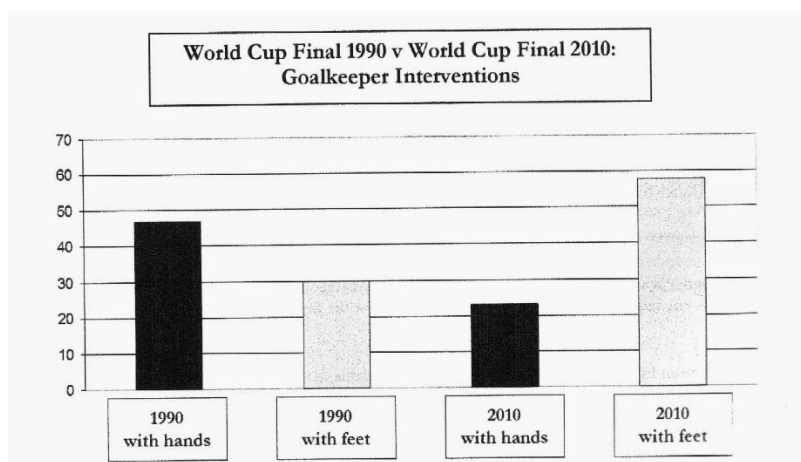


図1 1990年W杯決勝と2010年W杯決勝の比較 出典：Power2014,p.197

このグラフが示しているように、バックパス・ルールの変更前は GK が手でプレーする回数のほうが多かったが、変更後は足でボールを処理する回数が増えている。さらに 2010 年決勝の両チーム GK のパフォーマンスを分析した図 2 ではそれぞれの具体的な回数が見られている。

表 1 2010 年 W 杯決勝、オランダ対スペインの GK のパフォーマンスの比較 出典：FIFA, *Goalkeeping*, 出版年不明, P.226

The Netherlands v. Spain	Stekelenburg			Casillas			Total 90' + 2x15'
	1 First half	2 Second half	Total 90' + 2x15'	1 First half	2 Second half	Total 90' + 2x15'	
Intervention in play and defensive dead-ball situation (*)	21	15	36 + 11	15	5	20 + 5	56 + 16
Distribution from dead-ball situation (**)	5	5	10 + 8	7	8	15 + 4	25 + 12
Intervention with hands	7	5	12 + 6	8	3	11 + 3	23 + 9
Intervention with feet	19	15	34 + 13	14	10	24 + 4	58 + 17

* Defensive dead-ball situations: free kicks and corners by opponents

** Dead-ball situation: goal kicks and free kicks near the goal taken by the goalkeeper

The goalkeepers' actions during extra time are shown in blue in the table.

この表 1 に示されているように、スペインの GK は手でボールを処理する回数の 2 倍、オランダの GK に至っては 3 倍近く足でボールを処理している。また、FIFA が 2004 年から 2005 年シーズンに 43 試合を対象に行った調査では、GK のプレーの約 3 分の 2 が足元でのプレーであることが明らかになっている。

こうして 1992 年のバックパス・ルール導入以降、GK に従来から必要とされている「ゴールを守る」ためのハンドリングテクニックだけでなく、味方からのバックパスを足でコントロールし、さらに配給するという技術が求められていることが分かる。

第 2 項 ゴールキックのルールの変更

ゴールキックについて、以前はキックしたボールがペナルティエリアを完全に出た時点でインプレーとなっていた。つまり、ボールがペナルティエリアを出る前には、味方であろうが相手であろうがボールを触ることができず、触れた場合はもう一度やり直しとなった。しかし、2019 年 7 月にゴールキックのルールが変更され、ゴールキック時に相手チームの選手はペナルティエリアに入れないものの、キックが行われた時点でインプレーとなり、ペナルティエリア内での味方へのパスが可能になった。その結果、GK がゴールキックの際にボールを失う可能性が高いロングボールを蹴るのではなく、ボールを失う可能性が低いペナルティエリア内に位置を取る味方選手にショートパスを出し、ビルドアップでプレーを再開するチームが増加することとなった。つまり、現代サッカーの戦術的傾向の

一つである「ボールを支配する」という部分で、このルールは有効なのである。しかしながらゴールキックからのビルドアップを狙ってボール奪取を試みることもできる。早い段階で GK へプレッシャーをかけ、ボールを奪えばそれは大きな得点チャンスとなるからだ。

したがってここで重要となるのが GK の足元の技術であり、さらにフィールドプレイヤーとしての技術・判断力である。GK の足元の技術が高ければ高い位置でのプレッシャーをいかいくることができる、さらに相手が前線から人数をかけてボールを奪いにきており最終ラインの人数が減っているため、正確な判断力とキックの技術があれば一気にチャンスを構築できるのである。したがって、GK のフィールドプレイヤーとしての技術・判断力が高いほど相手は前方からプレッシャーをかけることができなくなり、その結果、後方からのゲームの組み立て、ビルドアップが容易になり攻撃のオプションが増えることになる。こうしてゴールキックのルールの改正により GK に対するフィールドプレイヤーとしての能力が、今後ますます必要とされることが考えられる。

第2節 現代サッカーの戦術

第1項ポゼッションサッカー

現代サッカーの特徴として、攻撃に於いてはボールを失わずパスワークによってボール保持率を高め、ゲームを支配し攻撃を組み立てようとするチームが増加している。スペイン・リーガ・エスパニョーラの FC バルセロナ、イングランド・プレミアリーグのマンチェスターシティはその代表的なチームである。

第2項ハイプレス

守備に於いては DF ラインを高く設定し、相手を複数人で囲い込むことで素早くボールを奪い、ゴールに結びつける攻撃的な守備をする傾向が強くなっている。2022 年カタール W 杯においては日本代表も前田大然選手がスプリントを繰り返し相手 GK や DF にプレッシャーをかけるようなハイプレスをかけてショートカウンターを狙うような戦術が取られるようになった。したがって選手間の距離が短くなり、相手に対するアプローチやコンタクトプレーが激しさを増し、考えるスピード、プレースピードの速さが求められるのである。以上の2点をふまえて、イタリア人指導者レナート・バルティは次のように現代サッカーの特徴を述べている。

「モダンサッカーの進歩は、積極的にボールを支配し、ゲームを支配する戦い方を良しとする、したがってボール保持の局面では後方からパスを繋いでビルドアップし、主導権を握って戦おうとする方向へと向かっています。リーグの中で戦略的に優位性のある強豪クラブはもちろん、多くの試合で劣位に立たざるを得ない中堅・弱小クラブですら、そうした志向を強めています。その一方でボール非保持の局面では、アグレッシブにボールにプレッシャーをかけて、できる限り短時間で、そしてできるだけ高い位置で奪回しようとする。それが最も効率的かつ効果的に相手ゴールに迫るための手段であるからです。この

2つはいずれも、プレーの中に GK がアクティブな形で関与することを要求します。つまり、ビルドアップの参加と最終ラインの裏のスペースのカバーです。」

(バルティと片野、2021、p.41)

第3項PK ストップの技術

W 杯のようなノックアウト方式の大会では PK 戦が増加傾向にあり、カタール W 杯では PK 戦の実施数が過去最多の 5 試合、ロシア大会では 4 試合で PK 戦が行われ、実際に日本がベスト 16 で敗退した 3 大会のうち 2 大会は PK 戦で敗れているように、GK の PK ストップの技術の重要性が高まる傾向にある。

表 2 W 杯における PK 戦の回数と結果

1982年スペイン大会(1)	準決勝 西ドイツ 5-4 フランス
	準々決勝 フランス 4-3 ブラジル
1986年メキシコ大会(3)	準々決勝 西ドイツ 4-1 メキシコ
	準々決勝 ベルギー 5-4 スペイン
	決勝トーナメント1回戦 アイルランド 5-4 ルーマニア
1990年イタリア大会(4)	準々決勝 アルゼンチン 3-2 ユーゴスラビア (現:セルビア)
	準決勝 アルゼンチン 4-3 イタリア
	準決勝 西ドイツ 4-3 イングランド
	決勝トーナメント1回戦 ブルガリア 3-1メキシコ
1994年アメリカ大会(3)	準々決勝 スウェーデン 5-4ルーマニア
	決勝 ブラジル 3-2イタリア
	決勝トーナメント1回戦 アルゼンチン 4-3イングランド
1998年フランス大会(3)	準々決勝 フランス 4-3イタリア
	準決勝 ブラジル 4-2 オランダ
	決勝トーナメント1回戦 スペイン 3-2アイルランド
2002年日韓大会(2)	準々決勝 韓国 5-3スペイン
	決勝トーナメント1回戦 ウクライナ 3-0 スイス
2006年ドイツ大会(4)	準々決勝 ドイツ 4-2アルゼンチン
	準々決勝 ポルトガル 3-1イングランド
	決勝 イタリア 5-3フランス
	決勝トーナメント1回戦 パラグアイ 5-3 日本
2010年南アフリカ大会(2)	準々決勝 ウルグアイ 4-2 ガーナ
	決勝トーナメント1回戦 ブラジル 3-2 チリ
2014年ブラジル大会(4)	決勝トーナメント1回戦 コスタリカ 5-3 ギリシャ
	準々決勝 オランダ 4-3コスタリカ
	準決勝 アルゼンチン 4-2オランダ
	決勝トーナメント1回戦 ロシア 4-3スペイン
2018年ロシア大会(4)	決勝トーナメント1回戦 クロアチア 3-2 デンマーク
	決勝トーナメント1回戦 イングランド 4-3 コロンビア
	準々決勝 クロアチア 4-3ロシア
	決勝トーナメント1回戦 クロアチア 3-1日本
2022年カタール大会(5)	決勝トーナメント1回戦 モロッコ 3-0スペイン
	準々決勝 クロアチア 4-2ブラジル
	準々決勝 アルゼンチン 4-3オランダ
	決勝 アルゼンチン 4-2フランス

第3節 本研究の問題意識

GKにとって、バックパス・ルールの導入やゴールキックのルールの変更とポゼッションサッカーやハイプレス戦術と相まって、現代サッカーのGKの役割としてゴールを守る技術だけでなくGKもまた積極的にプレーメイキングに関わることが求められるようになった。また、W杯のようなノックアウト方式の大会においてPKストップの技術をはじめゴールを守る技術が勝敗に大きく影響を与えるようになっている。

このように攻守における戦術的な進化によりGKの役割は大きく変化し、足元の技術においてフィールドプレイヤー(以下FP)と同等かそれ以上に高度な技術と判断力と、ゴールを守る技術の両方が高い水準で求められており、世界でもこの変化に対応できるGKは多くない状況である。筆者の現役時代と比べて現代サッカーにおけるGKの役割に大きな変化を感じているが、強豪国はGKの育成や強化をどのように行っているかに疑問を持っている。

第4節 先行研究

日本においてこうしたGKの役割変化について研究したものとして、末永ら(2001)がある。末永らは1992年のバックパス・ルールの変更以後、GKの足を使うプレーがいかに増加しているかを、1998年W杯本大会で準決勝に出場したGK4選手のプレー、および日本代表歴のある4人のGKのJリーグや代表戦におけるプレーから分析した。さらに、ジュニア年代から大学生年代までのサッカー指導者138名にアンケートを行い、日本でのGK指導の現状を把握しようとした。前者では、1994年のアメリカ大会に比べてスローイングやバントキックの頻度が減り、足でのプレーが増加したことが確認され、さらにオランダのファン・デル・サールは極めて高い水準でビルドアップに関わっていることがわかった。また後者のアンケート調査では、指導者たちはGKの新たな役割は認識しつつもGK専門のコーチがいない状況が多いことが明らかになっている。

Sainz de Baranda Pilar et al.(2006)2002年日韓W杯に54試合に出場した34名のGKを対象に、相手の攻撃の種類、相手からラストパスを出されたエリア、最もよくシュートを打たれたエリアの分析や、ラストパスやシュートを止める際に最もよく使われる体の部位の調査が行われていた。また、Sainz de Baranda Pilar et al.(2019)は2011年女子W杯のGKの攻撃と守備について分析し、予選突破をした国は、予選敗退した国よりもGKの攻撃参加が多くパスの成功率が高いことが示された。このように、GKのスタッツの分析からGKの傾向を捉えようとする研究が行われていた。

Fabian W et al.(2020)は、15人のゴールキーパー専門コーチを対象に「現代サッカーのゴールキーパーはどのようにトレーニングを行っているのか」という包括的な研究課題を検証し、半構造化インタビューにより、GKのパフォーマンスにとって重要なスキルに関

する専門家コーチの見解と、これらの重要なスキルを開発するために使用されているトレーニングアプローチを調査した。その結果、GK コーチは、意思決定スキル、運動能力、メンタリティー、テクニカルスキルの 4 つのスキルセットが必須であるとみなしていることが明らかになった。

末永ら(2001)をはじめ GK を対象に行われた研究は非常に意義深いものではあるが、筆者が問題意識として挙げた GK の足元の技術が求められている傾向を裏付けるものとはなるものの、実際のトレーニング内容を示すには至っていない。また Fabian W et al.(2020) は各国の GK にインタビューをしているが、現代サッカーの戦術的進化を足元の技術という観点に絞った調査は行われておらず、GK の役割変化に対応した具体的な育成の考え方や指導法の提示には至っていなかった。

第 5 節 目的

本研究は、現代サッカーにおける GK の役割の変化に基づいた練習内容や考え方について国内外の事例を踏まえ、新たな GK の練習法を提示することを目的とする。

第2章 方法

第1節 事例の収集

第1項インタビュー調査（クラブ関係者）

ブラジル(サントス FC、アトレチコ・ミネイロ)

ブラジルのサントス FC のトップコーチである Mauro Mestriner と U23GK コーチの Fabio Antunes 氏、さらにアトレチコ・ミネイロのトップチーム GK コーチ及び育成ダイレクターを務めている Danilo Minutti を対象とし、マウロ氏とファビオ氏には 2022 年 6 月 28 日に、ダニロ氏には 6 月 16 日にそれぞれ ZOOM にて 90 分程度で「近年の GK の役割や位置付け」「GK の具体的な練習内容」「GK の育成に対する考え方」等の質問を行った。

欧州トップクラブ

ハビエル・ガルシア氏は世界的に評価の高いスペイン人指導者ウナイ・エメリ監督の腹心として、イングランド・プレミアリーグのアーセナル FC、フランス・リーグアンのパリサンジェルマン、スペイン・リーガ・エスパニョーラのセビージャ FC、ビジャレアル CF というヨーロッパ屈指の強豪クラブを渡り歩き、UEFA チャンピオンズリーグの舞台を経験してきた。現在はイングランド・プレミアリーグのアストン・ヴィラ FC で GK コーチを担当し、それぞれのクラブでリーグ優勝、またはカップ戦のタイトル獲得に貢献し、GK の指導に於いて高い評価を得ている。ガルシア氏には 2022 年 8 月 5 日、ZOOM にて 60 分程度で「トップクラスの GK の条件」と「トップクラスの GK との接し方、導き方」、「トレーニング方法」、「ガルシア氏が考える GK そのものの捉え方」等の質問を行った。

FC 東京

FC 東京の U15 で GK コーチを務め、現在は FC 東京トップチームのアシスタントコーチをされている山下渉太氏を対象とした。山下氏には 2022 年 3 月 6 日に ZOOM にて 60 分程度で「J リーグクラブの下部組織の現状」「ジュニアユース・ユース年代の GK 育成の課題」等の質問を行った。

第2項インタビュー調査(元選手)

元アルゼンチン代表 GK ウルバド・フィジョール氏

元アルゼンチン代表 GK で 1974 年、1978 年、1982 年と 3 度の W 杯に出場し、1978 年アルゼンチン大会の優勝メンバーであるフィジョール氏を対象とした。フィジョール氏は現役時代 1 対 1 の局面を得意としており、相手のドリブルに対して飛び込まずに駆け引きをし、相手の動きを観て対応するという当時としては独特な手法で何度も決定機を防いだ。引退後は、アルゼンチン代表の GK コーチを務める等、後進の指導に力を注ぎ、現在

はアルゼンチンの名門 CA リーベル・プレートのアドバイザーとして活躍している。2022 年 W 杯カタール大会で優勝したアルゼンチン代表の GK の活躍にもあったようにアルゼンチンもまた優秀な GK 人材を輩出する国である。フィジョール氏には 2022 年 7 月 8 日に ZOOM にて 60 程度で、「アルゼンチンにおける GK の考え方と育成」、「フィジョール氏の W 杯で優勝した経験」等の質問を行った。

第 3 項 インタビュー内容の分析方法

録音したインタビュー内容の逐語録を作成し、内容の要約を行った。

第 4 項 文献調査

日本の GK の育成状況について記載がされている日本サッカー協会からの提供資料等の文献調査を行った。

第 5 項 筆者の経験

Masters et al. (2007) は、PK のキッカーが GK の動きを意識しないで蹴る場合と意識して蹴る場合では、意識しないで蹴る場合の方がゴールする確率が高いことを示したものや、Michael Horn et al.(2020) プレミアリーグの試合中の PK の得点の傾向を調べシュートコースが上の方が下の方より得点をする可能性が高いことを示したもの等、統計的に PK の成功率を検証するような研究が行われていたが、具体的に PK ストップの技術や経験をまとめた研究はなかった。従って、筆者の PK の経験当事者・自己しか知り得ないことを解明する方法とされる自己エスノグラフィー(autoethnography)の方法に準じ、筆者が選手として経験した 2004 年アジア杯ヨルダン戦、2006 年 W 杯クロアチア戦、2007 年アジア杯オーストラリア戦と指導者として経験をした 2021 年オリンピック東京大会において、取り組んだことや考えていたこと等を書き出した。

第6項 倫理的配慮

倫理的配慮として、インタビュー冒頭に本インタビューの趣旨と発表媒体について説明した後、実名の使用や画像の使用の条件についてそれぞれ説明し、同意を得た。

第2節 本研究の構成

本研究は次の5部構成からなり、第3章では日本のGKの育成の現状、第4章ではブラジルにおけるGKの指導、第5章では欧州トップクラブにおけるGKの指導、第6章ではアルゼンチンにおけるGKの指導、第7章では筆者のPK戦の経験とした。各章において結果と考察を述べ、第8章にて総合考察として日本及び海外の事例を踏まえて新たな練習方法の提示を行った。

第3章 結果1 日本における GK 育成の現状

本章では現在の日本サッカーにおいて GK がどのような指針のもとに、どのように育成されているのかを明らかにし、そこでの課題を示した。まず、日本サッカー協会（JFA）がこれまでにどのような育成方針を提示してきたのか、さらに J リーガーとなる GK がどのようなパスウェイを通過してきたのかを JFA の資料から整理する。次に、高体連の資料をもとに、U18 世代の GK のパフォーマンスが J ユースクラブと高体連チームとでどのように異なるかを示す。最後に、実際の育成現場ではどのような基準・判断によって GK をスカウトし育成しているかを、FC 東京の U15 チームのコーチを務めていた山下氏へのインタビューから明らかにしていく。

第1節 これまでの JFA の育成方針

日本サッカー協会技術委員で 1999 年 JFA・GK プロジェクトを立ち上げた加藤好男氏は、2006 年の段階で JFA として年代ごとに GK 育成の課題について報告している（JFA テクニカルニュース 44 号）。以下にその要点を整理していく。

まず U-12 年代の問題点は以下の 3 つだとされる。1 つ目はロングフィードの多用を改善することである。ショートパスと比較するとロングキックでのパス成功率は低くなる。試合状況に応じてロングキックも時には必要となるが、ボールを相手に簡単に渡さないために正確なパスを繋いでゴールに結びつける習慣を身に付けなければならない。2 つ目は運動能力の低下である。ここ数年の U12 世代の GK の動きをトレーニングで観察したところ、前転、後転、側転といった身体の操作性と柔軟性の低下、ボールを遠くへ投げることができないといったことが課題として見受けられる。これは、学校体育の授業で行われていたマット運動や器械体操といった運動種目の減少、サッカー以外の野球やソフトボール、ドッジボールといった上半身を使った競技を行っていない現状が理由として考えられる。3 つ目はプレスキックが蹴れないことである。この年代は「サッカーをする」ことが推奨されており、ドリブル練習やパス練習、ボールコントロールの練習に比重が置かれている可能性が高く、ピッチサイズも含めキック練習の頻度が少ないことが考えられる。サッカーはボールを蹴ることがベースであり、ボールを置いて蹴る、又は持って蹴るためのトレーニングの必要性を今後考えていくべきである、とする。

次に U14 年代の課題は以下の 3 つである。1 つ目は GK の姿勢づくりであるが、GK の動作獲得を含め、この年代が最も重要な時期だとされる。FIFAW 杯に出場している選手を見ても同様な姿勢が見られることから、U14 世代から素早い動き出しを意識した上での GK としての基本姿勢を身に付けていく必要がある。2 つ目はキャッチングである。GK にとって最もベーシックであり重要なテクニックである。この年代は、ボールのサイズ(4号

球から 5 号球)、GK 自身の手の大きさの変化に伴い、身体的な特徴も飛躍的に変化していく。そうした状況を踏まえ、正確なキャッチングを行うための手や身体の使い方を習得しなければならない。従って、ボールの変化やボール状況に適応し、安定したキャッチができるための反復トレーニングが重要である。3 つ目はゲームへの関わり。サッカーでは、味方がボールを保持しているときの攻撃、相手がボールを保持しているときの守備、味方ボールから相手ボールに変わる攻撃から守備への切り替え、相手ボールから味方ボールに変わる守備から攻撃への切り替えと、4 つの局面が存在する。この 4 局面のなかで、ボールに関与していない時の GK の役割は、味方選手に情報を伝えるコーチング、状況に応じて対応するための準備である。相手がボールを保持している時の自身の守備は意識できているが、自身がプレーに関わっていない時の「ゲームへの関わり」を今後、追求していく必要があるという。

U16 年代の課題としては以下の 5 つが挙げられている。1 つ目はシュートに対しボールを掴むか弾くかの判断と弾く際のプレーである。この年代からボールの回転やスピード、自分との距離や変化に対し、掴むか弾くかの適切な判断が求められる。弾くのであれば、ゴール前へリバウンドを作らないために弾く方向を限定する。またはチームメイトと連携して味方の攻撃へ繋げるための状況判断とプレー技術も求めていく必要がある。2 つ目はクロスの対応である。この年代では、トレーニングではクロスボール(ハイボール)に対し高い位置でボールをキャッチできている。しかし試合では失敗を恐れるからかチャレンジできていない、又はトレーニングでできているがことが試合で発揮されていない。これは、結果でプレーが評価される若年層の GK にとっての問題でもあり、指導者の働きかけも含め、今後追及していく必要がある。さらに相手選手とのコンタクトに対する体幹の強さやボールを弾く際のパンチングスキルの改善等、段階的なトレーニングでのプレーの改善が求められる。3 つ目は攻撃への参加(配球)である。U-16 年代になるとゲームへの関わりに積極性が出てくるが、試合状況に応じた効果的な配球が出来ていないケースが見られる。また、攻撃参加(配球)に関しては、個人戦術やチーム戦術、チームのレベルによってプレーの選択が異なり、選手の特徴が顕著に現れる。試合との関連性もあるが、試合状況に応じたプレーの選択ができる個人戦術を身に付ける必要がある。4 つ目は体幹、筋力の強化である。現代の GK がボディコンタクトを受けるその背景は「ゴールキーパーチャージ」という GK が保護されてきたルールが改訂されたことにある。すなわち多少の接触があっても反則が取られないルールに変更されたのだ。そうした状況下では、GK は自分の身を自分で守る身体の強さが必要になる。また GK 自立期(完成期)へと向かうため、プレーの力強さも身に付けなければならない。5 つ目はリーダーシップである。GK という存在は最後尾から戦況を見つめ、選手に声を掛け、試合の流れや相手の状況を伝える存在であり、フィールド全体を見渡すことができるポジションである。プレー一つ一つの決断と責任が問われ、絶対的な信頼感が必要とされる。リーダーシップが重要なキーワードとして、GK のスキルと共に世界基準のメンタルを目指すことが求められている。

以上の加藤氏の報告から、JFA は 2006 年の段階で攻撃に関わる重要性和キックの質、ゲームへの関わりを課題として挙げており、育成年代から GK は 11 人目のフィールドプレイヤーとして機能する事を、2006 年当時から課題として認識させる取り組みを行っているのである。しかしながら、この報告から 15 年以上が経過した現在でも、それを具体的にどのような方法によって実現していくのかが模索されているのである。

第 2 節 J リーグ登録 GK のパスウェイ

サッカー選手の育成は中体連や高体連、街クラブや J クラブユースなど多岐にわたっており、GK の育成に関してもその在り方は様々である。本節では現在 J リーガーとして在籍する GK がそれまでどのような育成ルート（パスウェイ）を経てきたかを跡付け、現在の日本サッカーにおける GK のパスウェイとその特徴を示した。

JFA が、J リーグでプレーする選手達のパスウェイを調査したデータによると、2022 年の J リーグ(J1、J2、J3)では 217 人(日本人選手 198 人、外国籍選手 19 人)の GK が登録されている。ここではカテゴリーごとに GK のパスウェイとその特徴を整理し、3 種(中学年代)から 2 種(高校年代)、2 種から 1 種(プロまたは大学生)の育成年代の経路を示した。

表 3 J リーグ登録 GK の平均身長と平均年齢 出典：JFA

2022年 Jリーグ登録GK

	登録GK	人数	前年比	平均身長	前年比	平均年齢	前年比
J1	日本育成	60人	-8人	186.47cm	-0.16cm	28.78歳	+1.21歳
	その他	11人	+2人	190.27cm	+1.38cm	30.54歳	-0.23歳
	合計	71人	-6人	187.06cm	+0.16cm	28.85歳	+0.90歳
J2	日本育成	77人	+1人	186.00cm	+0.36cm	26.92歳	-0.33歳
	その他	5人	-2人	189.17cm	-1.12cm	25.57歳	-2.62歳
	合計	82人	-1人	186.22cm	+0.18cm	26.93歳	-0.33歳
J3	日本育成	60人		184.82cm		27.51歳	
	その他	3人		189.00cm		25.14歳	
	合計	63人		185.02cm		27.39歳	

JFA

J1、J2、J3 の各カテゴリーに於ける平均身長と平均年齢を示したものが表 3 である。平均身長は、J1 は 187.6cm、J2 は 186.22cm、J3 は 185.02cm と、若干ではあるがカテゴリーが上がるごとにサイズ(身長)の大きさを求められていることがわかる。平均年齢につい

ては、J2 が 26.93 歳と J1 の 28.85 歳、J3 の 27.39 歳と比較し最も若い数字となっていた。J1 のケースでは、日本最高峰のリーグとして、選手としての積み重ねてきた実績とパフォーマンス、豊富な経験からのチームへの貢献度といった要素が必要とされることから、平均年齢の高さが傾向として表れていた。

表 4 J リーグ選手の 2 種、3 種の出身区分 (J アカデミーは J クラブのアカデミー)
出典：JFA

リーグ (日本 育成選手数)		Jアカデミー	高体連 中体連	JFA福島	街クラブ	その他
J1 (60人)	2種 (高校年代)	34人(56.7%)	23人 (38.3%)	1人(1.7%)	2人(3.3%)	
	3種 (中学年代)	34人(56.7%)	10人 (16.7%)	1人 (1.7%)	15人(25%)	
J2 (78人)	2種	32人(41%)	46人(59%)		0人	
	3種	32人(41%)	13人 (16.7%)		32人(41%)	未経験1人 (1.3%)
J3 (60人)	2種	27人(45%)	33人(55%)		0人	
	3種	24人(40%)	16人 (26.7%)		20人 (33.3%)	

次に表 4 は、J リーグ選手の 2 種(高校年代)、3 種(中学年代)の出身区分である。横軸、3 種の欄を見てみると、街クラブから J リーグへ輩出している割合が、J アカデミーから J リーグへ輩出している割合に次ぐ高い数字を示していた。J2 に関しては J アカデミー、街クラブ共に輩出人数の割合が 41%と同じ数字であった。街クラブの存在が、3 種に於いて日本の GK 育成に貢献していることが分かった。

表 5 J リーグ選手の 3 種から 2 種への経路 出典：JFA

リーグ (日本 育成選 手数)	Jアカ→J アカ	Jアカ →高体 連	中体連 →Jアカ	中体連 →高体 連	街クラ ブ→Jア カ	街クラ ブ→高 体連	街クラ ブ→街 クラブ	JFA福 島 →JFA 福島	その他
J1 (60 人)	25人 (41.7%)	9人 (15%)	2人 (3.3%)	8人 (13.3%)	7人 (11.7%)	6人 (10%)	2人 (3.3%)	1人 (1.7%)	
J2 (78 人)	25人 (32.1%)	7人 (9%)	3人 (3.8%)	10人 (12.8%)	4人 (5.1%)	28人 (35.9%)	0人 (0%)	0人 (0%)	高体連 から 1人 (1.3%)
J3 (60 人)	19人 (31.7%)	5人 (8.3%)	1人 (1.7%)	15人 (25%)	7人 (11.7%)	13人 (21.7%)	0人 (0%)	0人 (0%)	

3 種から 2 種への経路について示したものが表 5 である。この表からカテゴリーが上が

るほど、JクラブのU15からU18での一貫指導が多くを占めていることがわかる。特にJ1では一貫指導の割合が41.7%と数字として顕著に表れていた。また、J2では35.9%の選手が街クラブから高体連のチームに進んでいる傾向がみられた。

表 6 Jリーグ選手の2種後の経路 出典：JFA

リーグ（日本 育成選手数）	Jアカ →大学	Jアカ→J	高体連→大学	高体連→J	その他
J1 (60人)	9人 (15%)	25人 (41.7%)	12人 (20%)	11人 (18.3%)	*ほか福島→大学 が1人(1.7%)・街 クラブ→Jが2人 (3.3%)
J2 (78人)	11人 (14.1%)	21人 (26.9%)	31人 (39.7%)	15人 (19.2%)	
J3 (60人)	13人 (21.7%)	14人 (23.3%)	26人 (43.3%)	7人 (11.7%)	

表6から、J1のクラブではアカデミーからそのままトップチームへと昇格している割合が全体の41.7%と、J2の26.9%、J3の23.3%と比較しても非常に高いことが分かった。また、J2のクラブでは39.7%、J3のクラブでは43.3%と約4割が高体連から大学に進む選手達を獲得していた。

以上のJリーグGKのパスウェイに関する資料から、以下の3点が明らかになった。

1つ目は、J1においては、中学生年代からJアカデミー(Jクラブ)で継続して育成された選手が多いことである。J1のレギュラーとしてプレー、又は在籍している選手(外国籍選手を除く)になると優秀な選手をクラブとして囲い込み、一貫指導で育成することで将来的にクラブのトップチームでプレーさせるビジョンがあることがわかる。

2つ目は、3種(中学生年代)に於ける、Jアカデミー以外の街クラブのJリーグに多くの選手を輩出している割合の高さである。中学生年代では、街クラブの存在が優秀なGKを輩出する上で重要な役割を果たしていることが結果からも明らかになっている。

3つ目は、J2、J3になると2種(高校年代)から大学、大学からプロという経緯が多くなることである。大学生の場合、クラブとしては即戦力としての期待値が高いため、GKにとってJ1のクラブのような外国籍選手が登録されているチーム状況での早い段階での出場機会の確保は難しい。従って、選手側の試合出場機会の確保と、クラブ側の求める選手像の一致が、J2、J3に大学卒業後の選手が多く在籍する理由として考えられる。

以上の結果をふまえば、J1のクラブであれば早い段階から選手をリクルートし、高いレベルで一貫した指導を与えることができていると考えられる。しかしその一方で、多くのプロ選手を輩出している街クラブや大学の一部のチームでは資金面その他の事情のため

に専属の GK コーチがいないケースが多く、選手が専門的な指導を受けていない現状もある。GK 育成の裾野を広げ、より幅広く可能性のある選手を発掘することを考えるならば、J アカデミー以外でも質の高い GK 指導を充実させるかが重要となるだろう。

第3節 高体連と J クラブの GK の状況

育成年代のサッカー選手にとって一つのクライマックスであり、さらに上のカテゴリーへ進む出発点となるのが 2 種といわれる U18 年代である。本節では U18 年代の GK の現状を整理していく。2021 年度に行われたユース年代(高校生)の大会、日本クラブユースサッカー選手権大会と全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会について、JFA テクニカルスタディグループ(TSG)が大会全般について総括し、守備、攻撃、切り替え、セットプレーの攻撃と守備についてそれぞれ報告している。そして GK についても報告されており、報告内容は以下の通りである。

第1項 クラブユースの GK の特徴

大会に参加した 116 人の GK の平均身長は 181.9cm であり、2019 年の 181.1cm、2020 年の 180.8cm の数字から比較すると約 1cm 伸びている。身長中央値は 182cm で、180cm 以上 185cm 未満が 50 人、185cm 以上 190cm 未満が 26 人であり、実際に試合に出場している大半はこの身長範囲内の選手達である。因みに 190cm 以上の選手が 7 人と、2019 年の 6 人、2020 年の 2 人から増えているが、試合に出場しているのは 2 人であった。GK の大型化は進んでいるが、この大会ではサイズに関する懸念材料はなかった。また、大会初戦に出場している GK32 人中 21 人がジュニアユースから昇格している選手達であり、クラブの一貫指導も成果を上げている。

守備に於いて上位進出したチームの GK はシュートストップに関しては、ボールスピードや回転、ディフレクションが有るか無いかの状況に対し、ボールをキャッチ、又は弾く判断と弾く方向を見極めた上で冷静且つ的確に対応していた。状況が把握し易い相手の中央からの攻撃に対し、的確なポジション修正と戦術的なコーチングができていたが、サイドからの同一視が難しい状況になると、重心移動、シュートの瞬間にポジションを取るタイミングにズレが生じ、失点する場面が多く見られた。

試合の流れの中でのクロス守備に於いては、時間とスペースに余裕がある状況のなかでは積極的にチャレンジしキャッチ、又はパンチングで防ぐ積極性が見られた。しかし、セットプレー(コーナーキック、フリーキック)での対応、いわゆるゴール前が密集した状態になるとそれ自体が気になってしまい、的確なスタートポジションからの冷静な判断ができなくなる傾向が見られた。

ディフェンスラインの背後をカバーする守備に関しては、ケアする意識は高くなっていた。ボール状況に対し、前後のポジション修正は頻繁に行っていたが、横方向へのポジション移動はプレーに関与しなくなるにつれ意識が薄くなっているように見えた。

またゴール、ペナルティエリアから飛び出し、ファールを与える場面も見られたが、これはボール状況や相手選手の走る方向、味方ディフェンスとのプレーの意図があるか無いかを総合的に判断できていないことが考えられる。DFラインの背後をカバーするポジショニングに関しては、ネガティブトランジション(攻撃から守備への切り替え)の場面では準備を含め緻密に修正されていたが、ポジティブトランジション(守備から攻撃への切り替え)の局面では緊張の緩みからか、切り替えが遅れてしまう場面も見られた。

攻撃での関わりに於いては、GKからボールを大事にする傾向が強くなっている印象があるとされている。ゴールキックからショートパスを繋いでビルドアップを試みるチームが増えていたが、相手陣内までボールを運んでいるとは言い難く、相手の速いプレスを回避できず、自陣でボールを失うケースが多かった。

オープンプレーに於いても、サポートポジションを取る、プレッシャーを受けた状況のなかでセンターバック、ボランチにしっかりパスを繋ぐことは習慣化されている。しかし、相手のプレスからボールを失うことを警戒し、逆サイドへの長い距離のパスや浮き球のパスを選択しない、又はチャレンジしない傾向が見られた。ディストリビューションに関しては、攻撃の優先順位を意識しゲーム状況や時間帯によって効果的にロングボールを供給していた。

クラブユースの GK に関しては以上のように報告されていた。

第2項 高校総体における GK の特徴

今大会における登録選手データから見ると、出場 52 チーム中、GK100 人の平均身長は 178cm であった。この数字は 2019 年の 177.1cm、2020 年の 177.4cm を上回っており、身長 185cm 以上の選手も 11 人と、過去 2 回の大会では 7 人であった数字を上回っている。また試合出場 GK の平均身長が 179.5cm、身長 185cm 以上が 8 人と従来に比べ GK の大型化が進んでいる。

守備の局面では、シュートストップのテクニックは安定しており、クロスに対する守備もチャレンジする積極性が見られた。ボールをキャッチするのか、又はパンチングで弾き出すかの判断も明確で、守備全般のテクニックの発揮はしっかりと習得されている印象を受けた。その一方でポジショニングに関しては改善の余地がある。相手の中央からの攻撃に対する守備では、視野の確保による状況把握ができていないが、スルーパスに対するスタートポジションの前後左右のズレや、構えのセットがされていない状態でシュートを打たれ、反応が遅れる場面が見られた。また、サイドからの速い攻撃になると、同一視することが難しくなるため、クロス又はシュートに対するポジション取りが中途半端になり、構えるタイミングが遅れる場面が見られた。チームが攻撃している場面、又は切り替えの局

面でのボールに関わっていない時の適切なポジションを取る意識が、やや希薄な印象を受けた。

攻撃の局面では、チームの戦い方によって GK のプレーの選択肢が異なっていた。後方からのビルドアップから、GK がショートパスで積極的に関わる一方で、自陣内でボールを失うリスクを避けるためにロングボール主体(ゴールキック含め)の戦術を取るチームも比較的多く見られた。常に攻撃の意識があり、ボールを確保したあとの守備から攻撃への切り替え(素早いスローイングやサイドボレー)が可能な GK が存在するチームは、上位進出を果たしている。

第3項 U18 年代の GK の現状

以上の報告から、U18 年代(クラブチーム、高体連)の選手達の共通点として、サイズの大型化、守備に於けるシュートストップでの安定したテクニックの発揮については、習慣化され進化していることがわかった。ただ、視野の確保が困難、又はゴール前に選手が密集している複雑な状況でのクロス守備ではクラブチーム、高体連共に課題を残している。攻撃、守備共にピッチの中で GK がどのようなポジションを取るべきかという戦術的な部分では、専門的な GK コーチの指導を受けているクラブユースの選手達が状況に応じたポジションを取れていることも報告から明らかになっている。

攻撃に関してはクラブユース、高校総体で比較するとそれぞれ特徴が分かれている。

表 7 クラブユースの攻撃のデータ 出典：JFA

GKからの攻撃(準決勝・決勝3試合の合計)データの比較										
		2019年			2020年			2021年		
		成功	失敗		成功	失敗		成功	失敗	
パス&サポート	長い	4	25	13.8%	7	25	21.9%	2	20	9.1%
	短い	42	8	84.0%	36	10	78.3%	38	9	80.9%
フィールドプレー	長い	0	2	0.0%	0	2	0.0%	0	2	0.0%
	短い	6	0	100.0%	0	0		10	0	100.0%
サイドボレー(ハーフボレー)	長い	2	7	22.2%	3	14	17.6%	1	8	11.1%
	短い	1	1	50.0%	0	2	0.0%	0	0	
転がしてキック	長い	2	2	50.0%	3	9	25.0%	0	2	0.0%
	短い	4	1	80.0%	0	1	0.0%	1	0	100.0%
スローイング	over	7	1	87.5%	3	0	100.0%	3	1	75.0%
	under	14	0	100.0%	10	1	90.9%	25	0	100.0%
ゴールキック	長い	2	38	5.0%	6	31	16.2%	4	25	13.8%
	短い	23	3	88.5%	6	5	54.5%	31	1	96.9%
フリーキック	長い	1	5	16.7%	3	17	15.0%	3	5	37.5%
	短い	1	2	33.3%	0	0		1	0	100.0%
プレー合計(成功率)		109	95	53.4%	77	117	39.7%	119	73	62.0%
GKが起点となり、失わずにハーフウェイラインを越した回数		39		19.1%	29		14.9%	31		16.1%

表 8 高体連・高校総体の攻撃のデータ 出典：JFA

■GKの攻撃参加データ(準決勝・決勝の3試合合計)

		2018年度			2019年度			2021年度		
		成功	失敗	成功率	成功	失敗	成功率	成功	失敗	成功率
パス&サポート	長い	4	6	40%	1	9	10%	1	19	5%
	短い	11	1	91.7%	10	0	100%	14	5	73.7%
フィールドプレー	長い	2	2	50%	1	3	25%	1	5	16.7%
	短い	2	0	100%	8	0	100%	1	1	50%
サイドボレー (ハーフボレー)	長い	1	26	3.7%	1	10	9.1%	2	30	6.3%
	短い	0	0	0%	1	0	100%	0	0	0%
転がしてキック	長い	0	12	0%	2	3	40%	4	9	30.8%
	短い	1	0	100%	0	0	0%	1	0	100%
スローイング	オーバー	5	0	100%	6	1	85.7%	5	0	100%
	アンダー	5	0	100%	7	0	100%	3	0	100%
ゴールキック	長い	5	28	15.2%	7	32	17.9%	3	43	6.5%
	短い	2	2	50%	2	5	28.6%	6	1	85.7%
フリーキック	長い	1	25	3.8%	2	15	11.8%	1	17	5.6%
	短い	0	0	0%	2	0	100%	2	0	100%
プレー合計(成功率)		39	102	27.7%	50	78	39.1%	44	130	25.3%
GKが起点となり、ボールを失わずにハーフウェーラインを越えた回数/割合		23回	16.3%	18回	14.1%	20回	11.5%			

表7、表8はクラブユース、高校総体それぞれの準決勝、決勝合計3試合の攻撃のデータに関する表だが、2018年度、2019年度、2021年度の攻撃でのプレー成功率を比較すると過去3大会に於ける平均は、クラブユースが50.7%に対し、高校総体は30.7%と20%近く低い数字となっている。GKが起点となり、ボールを失わずにハーフウェーラインを越えた回数の過去3大会の合計回数も、クラブユースの99回に対し高校総体の61回とクラブユースの選手達が効果的にボールを前線に運べていることが数字からも明らかになっている。このような数字の差は、高体連のチームの勝利偏重によるリスク回避、又はロングボール戦術の多用が要因として挙げられる。

ショートパスの多用と比較し、ロングボールの多用はプレーの成功率を下げることになるが、ロングボールを選択する場合の戦術的な工夫と選手起用を含め、2種年代から専門的なGKコーチの指導と、コーチの戦術的な理解力が攻撃でのプレー成功率の上昇につな

がることが考えられる。しかし、高体連のチームの学校の方針により専門的なコーチの招聘が困難であることも事実であり、この差を埋めることは容易ではない¹。

だがその一方で、クラブユースがすべて完成しているかというところでもないことがわかる。ディストリビューションにおける判断や、フィールド選手との関係性の構築についてはまだ十分ではないと報告されているのである。こうした現状は日本の GK が抱える課題といってもいいだろう。次節では、2022 年の W 杯で日本代表として活躍した権田修一選手を輩出した FC 東京の GK 育成について紹介していく。

¹ 報告の最後に高校総体に参加の 52 チーム中 4 チームが控えの GK を登録しておらず、GK 経験者のフィールドプレイヤーを兼任させているという報告があった。GK のみプレー可能な選手には厳しい現実ではあるが、サッカーの質の向上を考慮した場合、このような編成を行うチームが今後増加することも考えられる。

第4節 Jクラブ下部組織の現状 (FC 東京)

第1項 スカウティングについて

まずFC東京のジュニアユースは2チームあり、各チームに2人ずつ計4人をクラブとして同時に獲得できることで、複数の優秀な選手を指導できるメリットを感じていると山下氏は話していた。身体のサイズに関しては、本人と両親を見てサイズ感が出そうな選手に注目するという。また、小学生年代でGK経験のない選手でもGKとして獲得するケースもある。GKのプレーの面ではGKの技術面にはそれほど重きを置かず、難しいシュートをどのように入れられるか、その入れられ方を見ているという。そして想定外のことが起きた時の臨機応変さ、苦しい状況の中でどのような表情や振る舞いを見せるかという精神面、6年間のスパンで将来性を見ながら育てていくことの育成の本質も山下氏は強調していた。

第2項 ジュニアユース・ユース年代のGK育成について

FC東京のスカウティングは、想定外のことが起きた時の臨機応変さも1つの判断基準になっているが、現在普及が進んでいるGKスクールの必要性を強調しながらも、小学校年代からGKを中心にプレーしている子は「サッカーをする」機会が非常に少ないと感じていると山下氏は話している。臨機応変さ、すなわち判断力の改善は、現代サッカーにおいてGKのプレー経験だけでは解決できない問題であることも考えられる。以下、山下氏の発言はそれぞれ表として示した。

表9 ジュニアユース・ユース年代のGK育成に関する山下氏の発言1

発言
山下：ジュニア年代から強豪クラブでプレーしているGKの子は、ゴールを守るということに非常に長けていますが、スペースを守る、前に出てクロスに対して守るであるとか、FW、MF、DFラインがあって、GKというポジションの中で4人目のプレーヤーであるという感覚が薄い選手が非常に多いのが事実です。そういうGKの子をスペースで守らせたりする作業よりも、フィールドプレイヤーがGKをやるほうがスペースを守ることにに関しては非常にスムーズなのは、実際感じているところです。
山下：日本のサッカーの現状としてGKがプレーするという環境でいうと、「サッカーをする」という回数、判断をするという回数が非常に少ない。やはりゲームに勝ちたいというチーム事情もありますし、GKは前にプレーしに

行かないほうが、身長が 170cm ある GK がいれば、ゴールの前に立っているほうが守れます。そういう事情は私自身がジュニアユースの指導者だった時にジュニア(小学生)の GK を試合で見た時に、すごく感じました。

山下氏はジュニア年代(小学生)からの指導経験を踏まえ、ジュニア年代から結果を求め、ミスが許されない、子供達がチャレンジできない傾向である現状を危惧していた。

表 10 ジュニアユース・ユース年代の GK 育成に関する山下氏の発言 2

発言
山下：ゲームをどういう風に考えているかという時に、スペースにチャレンジしてミスが起きることに対して非常にシビアな指導者が多い。街クラブを含めて試合を見に行った時に、私が観た感覚ではすごく良いチャレンジをしている、又は良いプレーをしていると思うのですが、それを許容してもらえない日本サッカーの現状があるように感じます。そう考えた時にチャレンジしている GK が実際には多くないと感じています。もちろん、ゴールを守ることに焦点を当てることは GK にとって大事なことです、その考えだけではゴールを許すことが重いものになってしまい、ゴールされないことだけを考えてしまう。しかしサッカーをプレーするという意味では育成年代からもっともっとチャレンジしてほしいと思いますし、成長する上ではチャレンジは必要かと個人的には思います。

FC 東京の GK の育成の考え方としては、まずはクラブワークと代表ワークの相互作用により選手を成長させる狙いがあり、日本のトップ、又は世界を見据えた GK の育成を目指していた。FC 東京のチームフィロソフィーは、従来は堅守速攻型であった。速く攻めることでボールを失うこともあるが、それゆえに GK は必然的にプレー回数が多くなることで優秀な GK が育ってきた背景がある。現在はスペイン人が監督となり、ボールを保持する戦術を構築しつつあるが、GK コーチとしてはこれまで作り上げてきたチームのスタイルの変革とクラブの育成文化を同時に考えていた。また、チームフィロソフィーの変革に伴い、GK の基本技術とゴールを守るという本質的な部分の追求を今後も問い続けなければならないと山下氏は話していた。

表 11 ジュニアユース・ユース年代の GK 育成に関する山下氏の発言 3

発言
山下：ジュニア年代でキャッチングがうまいといっても、ジュニアユース(中学生)に上がるとボールスピードが上がりますし、毎回毎回指導者が代わってボールスピードが変わってくると、テクニックの使い方は変わってきます。そうな

ると、基本テクニックとは何かということを常にコーチ自身が疑わないといけ
ないと考えています。例えばキャッチングにはオーバーハンドキャッチ(ボ
ールを胸より高い位置で捉える技術)とアンダーハンドキャッチ(ボールを胸よ
り低い位置で捉える技術)の2種類の技術があります。現在、FC東京のトッ
プチームのGKでポーランド人のヤクブ・スオビクという選手がいますが、
彼はアンダーハンドキャッチを多用する傾向が強く、決してオーバーハンド
キャッチが上手いとは言えません。しかし、ボールをゴールに絶対入れさせ
ないという気迫が感じられます。やはり技術だけではなく、ゴールを守ると
いうメンタリティとゴールを守る本質的な部分は、要求し続けなければい
けないという話はスタッフ同士でしています。

FC東京には、伝統的に守備を大事にする文化がチーム内に浸透していた。山下氏には
現代サッカーに必要なGKの攻撃についての考え方について聞いた。

表 12 ジュニアユース・ユース年代のGK育成に関する山下氏の発言 4

発言
川口：FC東京ではGKの足元の技術をどのように捉え、どのように伸ばそうとして いますか？ 山下：個性の部分はもちろん大事ですが、我々は日本のトップ、又は世界を目指す クラブですので、ゴールを守ることも、スペースを守ることも、ビルドアッ プすることも、相手DFの背後へ蹴るキックの技術もすべて要求します。そ のための育成ですが、トレーニング自体を分類化・分割化して、1日のトレ ーニングで何をするのか、シュートストップ、ブレイクアウェイ、クロスの 守備、ビルドアップのどういう項目をトレーニングしたのかというところを 毎日記録し、GKコーチ自身が整理して、自分が教えたこと、トレーニン グしたいことだけに偏らないように、私自身と選手達へのフィードバックは 常に行っています。

以上のインタビューからFC東京のGKに関する育成と指導法、GKの理想像が明らか
になった。ジュニア年代での問題の解決法についてはGKの技術は早い段階で教え過ぎ
ず、チャレンジさせる環境を整えること、「GK」だけでなく、様々なポジションを経験す
ることで「プレー回数」を増やすこと、この2点を山下氏は強調していた。スカウティン
グについては「プレー回数」を増やすことで、サッカーへの理解度が養われるという視点
から、フィールドプレイヤーからGKへのコンバートも考えていることも示された。目指
すGKの理想像については、山下氏のインタビューのなかで、選手達は「世界」を見てお

り、「日本」という枠組みに縛られていないという話があった。現在 FC 東京に在籍している外国人 GK は J リーグ屈指の実力を誇り、選手達が日常でのポジション争いやトレーニングで刺激を受け、成長を実感していることで「世界」へと視野を広げていることが考えられる。また外国人コーチの指導における選手への働きかけも、日本とは違う次元での力強い提示(フォームの改善、ボールへのアタック等)であることから、山下氏は非常に影響を受けているという。選手だけでなく、指導者、フロント、クラブ(組織)、そして日本サッカー全体がより世界のスタンダードに目を向け、情報の収集のためのアンテナを張り、アップデートしていくことで世界を見据えた長期的な育成、すなわち攻撃的なスタイルの追求が、今後必要になってくる。

第5節 まとめ

以上、本章においては現在の日本サッカーの GK 育成の現状を整理した。日本では J クラブの一貫した育成がプロを輩出するという面では着実に成果を出しているが、その一方で街クラブや高体連、大学などそれ以外のパスウェイを通る選手たちにとっては必ずしも理想的な環境にあるとは言い難かった。さらに、勝利が優先される高校総体のような現場では、GK には失点のリスク回避が優先され、11 人目のフィールドプレイヤーとして攻守にわたって他の選手と関係を構築する積極的なプレーが出しづらい状況にあると考えられる。第1章で論じたように、今後世界のサッカーがますます進化し、GK も 11 人目のフィールドプレイヤーとしての技術や判断力が要求されることを予測すると、日本の GK 育成の現状は必ずしも明るいものではないだろう。

第4章 結果2 ブラジルにおける GK 指導

本章では新たな GK 大国となりつつあるブラジルの GK 育成について論じていく。これまでブラジルのサッカーと言えばペレやロナウジーニョのような攻撃的な選手が注目をされたが、GK の印象はそれほど大きなものではなかった。しかしながら現在では、リバプール FC のアリソン・ベッカーやマンチェスターシティのエデルソン・モラエスなど世界有数のビッグクラブ、しかも最先端の戦術を駆使するクラブで主力として活躍する選手が輩出されている。ブラジル強豪クラブのサントス FC とアトレチコ・ミネイロの GK 育成コーチへのインタビュー結果を以下にまとめた。

第1節 サントス FC の事例

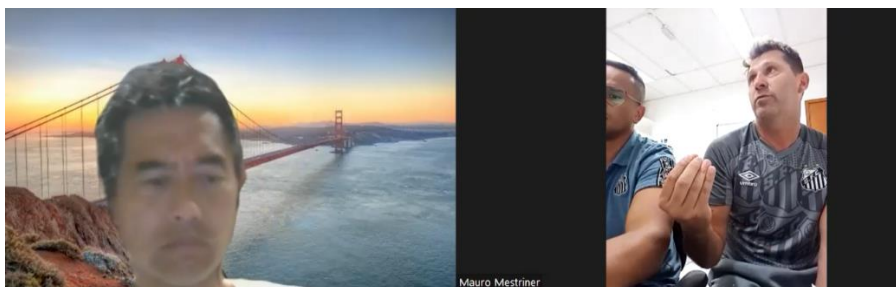


図 2 サントス FC マウロ氏へのインタビューの様子

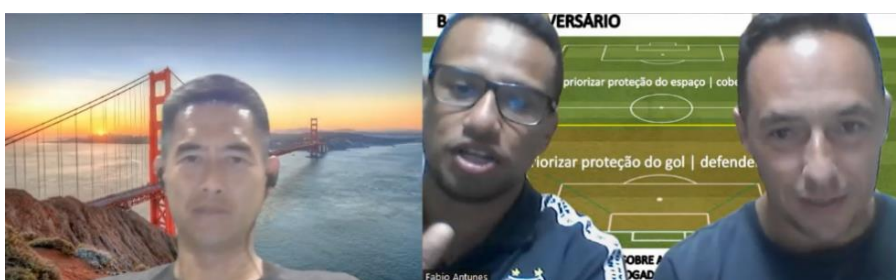


図 3 サントス FC ファビオ氏（右）へのインタビューの様子

第1項 スカウティングについて

サントス FC のスカウティング(育成)については、8 歳又は 9 歳からフットサルを始め 10 歳からサッカーと両立させていく。GK については 12 歳までは筋力トレーニングは行わず、まずは GK になりたいという気持ちを芽生えさせるため、GK の楽しさや GK への愛情が育むような取り組み、指導を行っているという。またサッカーだけでなく、一人の

人間としての成長を促すため、メンターに依頼し子供達へのソフト面でのサポートも重要視している。

サッカーにおける戦術的な落とし込みは 15 歳から行っており、試合状況を再現したトレーニングを大事にしていることがクラブの基本的な考え方であることがインタビューで明らかになった。以下、発言の詳細を表で示す。

表 13 サントス FC マウロ氏のスカウティングに関する発言内容

発言
川口：サントス FC では GK を何歳ぐらいからスカウトしますか？ マウロ：8,9 歳から室内のフットサルを始め、10 歳になるとサッカーと両立させていきます。 川口：なぜフットサルから始めるのですか？ マウロ：ブラジルでは文化的にサッカーの導入としてフットサルが使われます。フットサルは 1 対 1 の局面や、ボールに触れる回数も多い。さらにピッチサイズが小さいので素早い判断が必要になります。また、敏捷性や瞬発力も鍛えることができます。サントスではサッカーの入り口としてフットサルを使っています。
川口：それはサントス FC の GK のフィロソフィーに結びついているのですか？ マウロ：12 歳までは筋力トレーニングは行わずに GK をすることの楽しさ、GK の愛情を育むようにしています。サントスでは本格的な GK の活動は 13 歳から始まり、そこから 20 歳までを育成と位置づけています。大事なのはサッカーのトレーニングだけではなく、人間的な部分も成長させるようにしています。そのためサントスではメンターがいて、教育的な部分も含め、彼らが社会に出た後のことも考えています。
川口：何歳ぐらいからチーム戦術を落としていくのですか？ マウロ：サントスは育成のクラブという認識があり、現在のトップチームの GK はすべて育成出身です。戦術的トレーニングは 15 歳から始めます。GK コーチと監督でトレーニングを考えて、例えば CK の守備ではどのようにカウンターにつなげるかを練習します。したがって、試合の状況が再現されるようなトレーニングを大事にしています。

第 2 項 ブラジルの GK の現状と戦術的進歩について

マウロ氏に近年ブラジルからワールドクラスの GK を輩出している要因を聞いた。マウ

ロ氏は今に始まったことではなく昔からブラジルは素晴らしい GK を輩出していると自信を持って答えた。近年さらに GK のレベルが上がっている要因としては、育成年代での技術的な指導はもちろん、サッカーにおける戦術的な指導の進歩を理由として挙げた。守備では最終ラインのコントロール、攻撃ではフィールドプレイヤーとの連動や関わりといったサッカーの全体像を理解する必要性を指摘した。GK は「ゴールを守る」だけではない時代に進化した背景において、サントス FC の第一に攻撃の局面を考えるチームフィロソフィーが、現代サッカーの適応に役立っているとマウロ氏は語った。

表 14 サントス FC マウロ氏のブラジルの GK の現状と戦術的進歩に関する発言内容

発言
川口：ここ数年ブラジルではワールドクラスの GK を輩出しています。力を付けている要因は何でしょう？ マウロ：まず、ブラジルが良いキーパーを輩出しているのは今に始まったことではありません。昔からヨーロッパで活躍している選手もいるし、シジマル（清水エスパルスでプレー）も日本で活躍しましたよね。しかし近年さらに良くなった理由としては、育成において技術的な部分と戦術的な部分での指導が向上しているからだと思います。以前からブラジルの GK は技術を評価されていました。今もそうなのですが、現在はそれに加えて戦術的な進歩が挙げられます。守備の組織化に関わり、またそれを理解していること。攻撃も同様、GK が攻撃のタスクを理解していること。DF ラインともコミュニケーションが取れていて戦術理解が整っています。現在では GK は唯一手を使える選手というだけでなく、スーパーやリベロのような存在になっています。 ブルーノ（通訳・U15GK コーチ）：サントスではまず攻撃の局面について考えます。GK からのフィードや、足元を使っのプレーが大事になっており、GK が 11 人目のフィールドプレイヤーだという認識を持っています。 川口：先ほど言われたようにアリソンやエデルソンのようなブラジルの GK が世界で活躍している背景には攻撃の戦術理解が高いという要因があると思います。そこにはサッカーにおいて攻撃を好むというブラジルの国民性も影響があるのでしょうか？ マウロ：確かに攻撃が好きな国民性は GK にも影響していると思います。80 年代までは GK は守備の面だけを気にしていれば良かったのですが、現在は最終ラインのコントロール、攻撃では 11 人目のフィールドプレイヤーとして DF、

MF、FW との連動が重要になります。サントスが持っている攻撃的なフィロソフィーは現代サッカーへの適応に役立っていると思います。

第3項 指導法の変化について

マウロ氏にブラジルの GK の指導法の過去から現在に至るまでの変化を尋ねてみたところ、ハンドリングテクニックを中心としたトレーニングだけでなく、GK が味方からのパスを受け相手がプレッシャーを掛けてきた時の対処法、すなわち足元のテクニックを向上させるトレーニングは欠かさず取り入れていることが分かった。常に監督とコミュニケーションを図りながらフィールド内で GK がどのように攻撃の起点となり、守備をどのようにリードするのか。攻守の関わりを全体のトレーニングの中で GK に意識付け、フィールド選手との連携を構築するための必要な要素を TR から浸透させる。そして、常に試合状況を再現していくことの重要性をマウロ氏は述べていた。また、フィジカルにおいては瞬発力の重要性を強調していた。ジムでのトレーニングは試合での疲労を考慮し、下半身よりも上半身のトレーニングを MAX の 70% の負荷で行っていた。トップチームの選手になるとフィジカル全般の強化より、試合でベストなパフォーマンスを発揮するためのコンディション調整に趣が置かれるとマウロ氏は話していた。

表 15 サントス FC マウロ氏の指導法の変化に関する発言内容

発言
川口：現代サッカーに適応するために具体的な指導法に変化はありましたか？ マウロ：現代サッカーでは相手が 90 分間 GK までプレッシングしてきます。そういう面を考えると、以前より GK には時間がありません。トレーニングでそこへの対応をする必要があります。例えば GK だけでもプレッシングに対応するトレーニングを行います。一人が GK で他の選手は相手 FW の役をしてプレッシングを掛け、それをかわしてパスを出すといったトレーニングです。GK だけでもそういったトレーニングを行い、その後全体練習の中で監督と相談しながらフィールド選手にどのようにボールを預けるか、付けるかを確認し、フィールド選手との連携を構築していきます。 川口：GK にとって大事なフィジカルとはどのようなものでしょうか？また、抽象的ですがワールドクラスの GK を育てるには何が大事なのでしょうか？ マウロ：フィジカルについては瞬発系がとても重要でジムでのトレーニングも必要だと思います。上半身も下半身も重要ですが、下半身については試合での負荷を考えて回復がメインになることもあります。瞬発系については MAX の

70%で6～8回を3セット行います。ワールドクラスの GK についてはすべてが必要ですね。フィジカル、技術、人間性などの集合値です。現在ヨーロッパでは、GK は足元の技術が要求されるので、その部分と戦術的理解がある選手がヨーロッパに行けるのだと思います。

第4項ブラジルの GK 育成環境について

U23 チームのファビオ氏によると、ブラジルでは選手は早い年代から複数の GK コーチからの指導を受けており、各クラブチームに4人ほどのコーチがローテーションで各年代の指導に当たっていると述べた。また通訳のブルーノ氏(サントス・U15GK コーチ)は GK コーチという役職ができたのはブラジルが初めてであると話していた。

表 16 サントス FC ファビオ氏のブラジルの GK 育成環境に関する発言内容

発言
川口：事前の質問でブラジルでは早い年代からいくつものプロフェッショナルを経験しているとありましたが、どういう意味ですか？
ファビオ：各世代に GK コーチがいて、何人ものプロフェッショナルな GK コーチによって適切な指導を受けているという意味です。
川口：サントスだけではなく、ブラジル全体がそうなのですか？
ファビオ：大きなクラブではそうです。中小規模のクラブについてはだいたい GK コーチが4人ほどいて、ローテーションで各年代を指導しています。
ブルーノ(通訳・U15GK コーチ)：ブラジルは GK を育成する環境が整っていて、GK コーチという役職が始めてできたのもブラジルなのです。

第5項GKの捉え方とトレーニングについて

ファビオ氏に GK の捉え方とトレーニングについて質問したところ、まずは11人目のフィールドプレイヤー、常にチームとして切り離さない形で捉えている、すなわち「常にセットである」ことを強調していた。またトレーニングについては、様々なシチュエーションから複雑な判断を要し、フィールドプレイヤーとの関係性の中で必要なスキルを身に付けるためのトレーニングが重要だとファビオ氏は話していた。

筆者は15歳の時にブラジルの名門クラブ、インテル・ナシオナルに留学した経験がある。当時は GK に特化した連続の動きを繰り返す負荷の高いサーキットトレーニングがベースであり、それがブラジルの GK の代表的なトレーニングであった。しかし、ファビオ

氏によると現在は、当時主流だった GK に特化したトレーニングから、GK をチームから切り離さないサッカーの戦術的な要素が含まれたトレーニングが主流になっているという。そしてサッカーが進化していく過程において、戦術的ピリオダイゼーションの理論が GK のトレーニングにも導入される時代になってきていた。

表 17 サントス FC ファビオ氏の GK の捉え方とトレーニングについての発言内容

発言
川口：サントスの GK のプレーモデルはどのようなものですか？またそれは監督によって変わるのですか？
ファビオ：一つの定まったモデルはなくて、育成の各カテゴリで少しずつ違っています。ゲームモデルについては監督の権限が強いです。伝統的にサントスは攻撃的なサッカーを志向していて、FW が活躍するようなモデルがありました。ただそのゲームモデルと GK の育成とは必ずしもリンクしていません。GK 育成の基盤は別にあって、ゲームモデルは GK の戦略的な部分を補うものだと言っています。
ブルーノ(通訳・U15GK コーチ)：ファビオが試合を分析するにあたって、GK だけを見ることはありません。常にチームの組織、チームの一員として GK をみています。
川口：その中でファビオさんが求める GK の特徴はどのようなものですか？
ファビオ：まず、身体的特徴は最初に評価する部分ではありません。むしろ主体的でインテリジェンスはあるかどうかを評価します。常に正しい選択ができ、チームを助けることができるかということです。私は常に監督と相談しながらトレーニングを構築しています。どんなゲームにしていくのかアイデアを共有し、その上でトレーニングメニューを考えます。私は機械的なトレーニングを好まず、常に判断を伴うトレーニングを重視しています。
川口：私は 15 歳の時にインテル・ナシオナル(ブラジル、リオグランデ・ド・スル州、ポルトアレグレ市にあるブラジル屈指の強豪クラブ)に留学した経験があり、その時は連続の動きを繰り返したサーキットトレーニングが主流でした。現在ではそうしたトレーニングは行われていないのでしょうか？
ファビオ：今でもやっていると思います。ただ、私は GK を組織の一員だと捉えて

いるので、例えばDFラインと共にトレーニングするなど、フィールドの選手との関係のなかでトレーニングすることが大事だと考えています。今日はU17のトレーニングを行いました、チームが4バックでプレーしているのでその陣形のなかでGKも参加してプレッシングの対応やカバーリングをトレーニングしました。また、午後はGKからFWにボールを付けるアクションがあったので、午前中にロングキックのトレーニングをしました。

川口：ファビオさんはトレーニングのコンテクストを大事にされているようですが、それは戦術的ピリオダイゼーションの影響もあるのでしょうか？

ファビオ：そうです。戦術的ピリオダイゼーションの要素はかなり取り入れています。常にチームと一体化して、切り離さない形でGKを捉えています。戦術、技術、メンタルの部分でそれぞれを切り離してトレーニングをすることはしません。常にセットなのです。もちろんGKの技術に特化したトレーニングは必要ですし、神経系を刺激するトレーニングも必要です。しかしながらそれでも常にフィールドとの関係性をなくさないようにしています。常に判断を伴ったトレーニングです。

ブルーノ(通訳・U15GKコーチ)：ファビオはその他多数のGKコーチとは違って、常に複雑性、複雑な判断を伴うトレーニングを大事にしています。だからトレーニングは戦術的ピリオダイゼーションの要素もあり、常にフィールドの選手との関係性があるのです。サッカーにはあらかじめ何が起こるか分かった上で行えるプレーは存在しないのです。

川口：では、GKに必要なフィジカルや技術というのはより若い年代で身に付けておくということですか？

ファビオ：確かにその通りです。ただそれでも各年代に適した、ゲームと切り離されていない運動能力のトレーニングが必要だと思います。神経系の発達に関するトレーニングの必要性は川口さんの意見に賛同します。それでもなお、常にサッカーをプレーしなければならないのです。

川口：そうすると、サッカーの4つの局面(攻撃/守備/攻→守/守→攻)に応じてGKも関わってトレーニングするということですか？

ファビオ：そうです。4局面について常に理解をしながらトレーニングしなければ

なりません。例えば水曜日はいつもトランジションのトレーニングをします。守→攻については GK がボールをキャッチした後の攻撃への切替スピードについてトレーニングし、攻撃→守備については、ボールを失った後の DF ラインとの距離、ボールを視野に入れながら DF ラインとのコンパクトな距離を保ってカバーリングするトレーニングを行います。そうしたトレーニングが増えていますね。私は GK のプレーを二つに分類しています。一つはボールに関与するプレー、もう一つはボールに関与しないオフ・ザ・ボールのプレーです。オフに関しては、声を掛けながらフィールドの選手を配置し、指示を出すことが必要です。すなわち、自分にボールが来る前の予測と準備です。

川口：ゴールを守ることに関するトレーニングは相対的に減ったのではないですか？

ファビオ：以前は守備のトレーニングに時間を費やしましたが、現在では局面にあったプレーを選択できる選手が大切ですね。今ではフィジカルトレーニングでも、バーベルを担いでスクワットをするといったことはほとんどやりません。メデシンボールを使ったバランストレーニングなどですね。最後に私は 1 週間など短いサイクルでのトレーニングを信じています。長い期間ではなく、短いサイクルでのトレーニングが効果的だと考えています。

第 6 項 戦術的ピリオダイゼーション理論について

戦術的ピリオダイゼーション理論とは、1980 年代にポルト大学の数学者ビートル・フラデー教授が提唱したサッカー理論である。その後ジョゼ・モウリーニョやジョゼップ・グアルディオラなどの一流監督が採用し結果を残すことで有名になった。

戦術的ピリオダイゼーション理論の立場では、サッカーは多様な要素が相互に複雑に絡み合うと同時に、偶然性や不確定要素が多く含まれる複雑系のシステムであり、一部分を全体から切り離すことができないとする。したがって戦術的ピリオダイゼーションのサッカー観としては、サッカーというゲームの文脈から離れたプレーは存在せず、選手個人もまた全体の関係性から成り立っているとされる。どのような選手であれ相互関連のネットワークを構成する一要素であるという観点から、選手にとっての優先順位はチームとの関係性であることが、戦術的ピリオダイゼーションの基本的な考え方となる（Tamarit 2015）。

この戦術的ピリオダイゼーション理論を採用した場合、トレーニングは一部分を全体から切り離さないことが必要となってくる。つまり、単純なパスやコントロール、ランニングを行うのではなく、ゴールや味方、相手といった要素の関係性が設定され、攻撃、守

備、トランジションが複雑に生じる状況を設定するのである。GKについていえば、単純な1対1のシュートストップの練習よりも2対1になると複雑さが増すだろう。さらに3対3のシュートゲームになるといっそう状況が複雑になり、プレーに判断が必要となる。こうして複雑さを調整することで、フィジカルな負荷だけではなく状況判断を養うような機会を設けることが可能である。筆者はこれを「脳への負荷」という言葉を用いたい。つまり GK を他のフィールドプレイヤーとの関係のなかに配置し、実際のゲーム環境と類似した文脈を設定することによって、「脳への負荷」といった判断力を鍛えることができるということである。

第2節 アトレチコ・ミネイロの事例



図4 アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏（左）へのインタビューの様子

第1項 スカウティングについて

アトレチコ・ミネイロは、10歳からスカウティングが始まり、最初からトップチームと同じプレーモデルを要求する方針であった。またダニエロ氏は、GKに必要な守備の技術、守備における解決法、広い守備範囲に着目し、守備力が前提にあることが評価の基準であり、チームが求めるGK像であると話していた。以下、発言の詳細は表に示す。

表18 アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏のスカウティングについての発言内容

発言
川口：スカウティングについてどのような選手を求めていますか？
ダニエロ：GKに必要な三つの要素を見ます。まずは守備の技術、次は守備において問題解決ができること、最後はドイツのノイアーのように、プレー範囲が広いことです。評価の基準としては、守備が6割、攻撃面では4割といったところです。
川口：どのくらいの年齢からそういう基準で見めるのですか？また、プレーモデルは最初からトップチームと同じなのですか？
ダニエロ：10歳からスカウティングが始まり、トップチームと同じプレーモデルを要求します。

第2項GKトレーニングの進化について

現代のブラジルにおいても、連続したシュートストップや1対1対応のトレーニングは行われており、ダニエロ氏もそれを実践していた（図5、6、7）。これらのトレーニングはGKの守備に特化しており、体力的に負荷の掛かる強度の高いトレーニングである。ただし以前と比較すると週に2回程度とその回数は減っているようだ。なお以下に提示するト

レーニング画像はダニエロ氏に提供されたアトレチコ・ミネイロにおける実際のトレーニング映像から切り取ったものである。



図 5 連続のシュートストップの様子(1)



図 6 連続のシュートストップの様子(2)

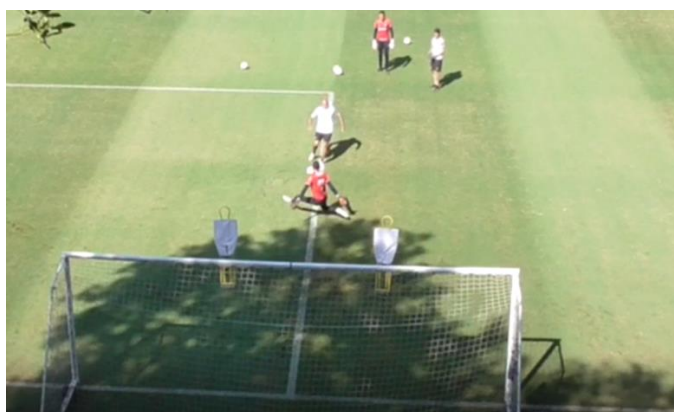


図 7 1対1の対応のトレーニングの様子

さらに、GKからのビルドアップについてもトレーニングが工夫されている（図8、9）。シュートをキャッチした後、味方にボールを預け連携してパスを回し、相手のプレッシャーを回避して2つのミニゴールへボールをパスする。状況を把握する能力、足元のボールテクニックが要求される（味方役がコーチ、プレッシャーを掛ける側が選手）。



図 8 シュートストップからのパストレーニングの様子(1)



図 9 シュートストップからのパストレーニングの様子(2)

こうしたトレーニングについてダニエロ氏は以下表 19 のように述べた。

表 19 アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏の GK トレーニングの進化についての発言
内容

発言
川口：アトレチコ・ミネイロが守備に比重を置く理由はなぜですか？ ダニエロ：ブラジル人 GK コーチの多くは GK に必要な技術とフィジカルを主にトレーニングしています。しかし、守備面でのトレーニングが多い中でも攻撃のトレーニングが進化しています。 川口：どのように進化しているのですか？ ダニエロ：進化というのはルール変更がきっかけです。1992 年まで GK は何秒でもボールを持つことができました。2000 年代に 6 秒ルールが採用され、今ではゴールキック開始時に味方選手とペナルティエリア内でパスを繋ぐことができます。以前は守備面に特化できていましたが現在ではビルドアップなど、必然的に GK が攻撃に関わるプレーが増えています。したがってトレーニングもそれを意識したものになります。 川口：私は 15 歳の時にインテル・ナシオナルに留学した経験があります。当時ブラジルの GK トレーニングは守備がメインでしたが、非常に素晴らしいトレーニングだと感じました。30 年前と今では大きく変わっているのでしょうか？ ダニエロ：30 年前は障害物を使ったサーキットトレーニングが多く、トレーニングの時間も長かったです。最近の傾向としてはサーキットをほとんど行わず、トレーニング時間も短いです。ポジショニングのトレーニングと技術的なトレーニングを効率良く、高強度で行っています。キャッチングやシュートストップなど、基本的には最高の強度で本数は少なめに行っています。 川口：以前は連続の動き、反復のトレーニングが多かったと思いますが、現在は？ ダニエロ：週に 2 回 GK だけのトレーニングを行い、その時に連続の動きを取り入れたトレーニングを行いますが、それ以外の日は試合を想定したクロス対応、1 対 1、ポゼッションのトレーニングをチームに合流して行います。

第3項 戦術的変更への対応

2020-2021 シーズンでは、過去にアルゼンチン代表やチリ代表の監督を歴任し、2015 年に行われたコパ・アメリカ(代表チームの南米選手権)でチリ代表を優勝に導いた実績を誇るホルヘ・ルイス・サンパオリ氏がアトレチコ・ミネイロの監督に就任した。GK の育成を含めて守備の哲学が定着しているアトレチコ・ミネイロに、サンパオリ氏は GK からのビルドアップと、相手陣内で素早くボールを奪いに行くために必要な GK の広い守備範囲の2つを要求し、より攻撃的な戦術をチームに浸透させた。その結果として、しばらく低迷していたクラブは国内タイトルの奪還に成功し、さらにサッカーのスタイルが世界のスタンダードに近づいたことで、クラブの育成方針と方向性が明確になった。

しかしながらサンパオリの要求は GK のトレーニングを根本的に組み替えることを意味していた。ダニーロ氏は当初、そうした要求に困惑したという。しかし最終的にはサンパオリによる改革はクラブの成功にとって必要だったと考えている。以下がその発言である。

表 20 アトレチコ・ミネイロ ダニエロ氏の戦術的変更への対応についての発言内容

発言
川口：ルール変更に加えて、サッカーの戦術的進化もまた GK のプレーに影響を与えていますか？
ダニエロ：2020 年にホルヘ・サンパオリ監督(アルゼンチン人)になり、アトレチコ・ミネイロの戦術を進化させました。それによって、常に GK を含むビルドアップが当たり前のものになりました。
川口：先ほどアトレチコ・ミネイロの GK の評価は守備に比重を置くと言われましたが齟齬はありましたか？
ダニエロ：最初は簡単ではありませんでした。サンパオリが最初に来たとき、私がやっていたトレーニングは受け入れがたいものだったようです。だからトップチームも育成も、トレーニング方法を変えなければならませんでした。
ダニエロ：正直なところ、最初は戸惑いました。文化的に守備的なトレーニングに慣れていたので。しかし、サンパオリの考えを吸収してなんとかできるようになっていきました。とにかくサンパオリは、DF ラインと GK が離れることを嫌いました。ですから、DF ラインとコンパクトに連動して動くようなトレーニングを構築しました。つまり、サンパオリによって二つの変化がもたらされました。一つは、GK が攻撃の組み立てに参加するということ。もう一つは、相手陣内に押し込んでいるとき、GK は DF ラインとの距離を近くに保つということです。
川口：サンパオリによって GK のプレーが改革されて、結果としてどうになりましたか？
ダニエロ：失点に関してはビルドアップのミスによるものはありましたが、相手がボールを保持した状態での失点は減りました。また、DF ラインの背後のカバーや高い位置でのインターセプトが増えたことで、GK が相手 FW と 1 対 1 になるシーンが減りました。結果として相手をゴールから遠ざけることができ、スタッツ的にもボールの回収率が上がり、チームの攻撃の時間が長くなりました。したがってこの改革は良い結果を生んだと思います。
川口：最後になりますが、アリソンやエデルソンなどブラジルの GK がヨーロッパ

のクラブで最新の戦術に対応しているというのは、こうしたブラジルの育成を
経ていることによるのでしょうか？

ダニーロ：アリソンは U20 のブラジル代表でプレーしており、その時から高い技術
が評価されていました。基本的にブラジルの GK 育成に関してはそれぞれの
クラブで大きな差はなく、ブラジル全体として技術的な面が優れていてフィ
ジカルを大事にするという文化があります。そういう文化によってヨーロッ
パでの適応が可能になったのではないのでしょうか。

第4項 GK エヴェルソン選手のスタッツ

図 10 はサンパオリ就任前と就任後の GK エヴェルソンのパスの回数とその成功数の経
年変化である。

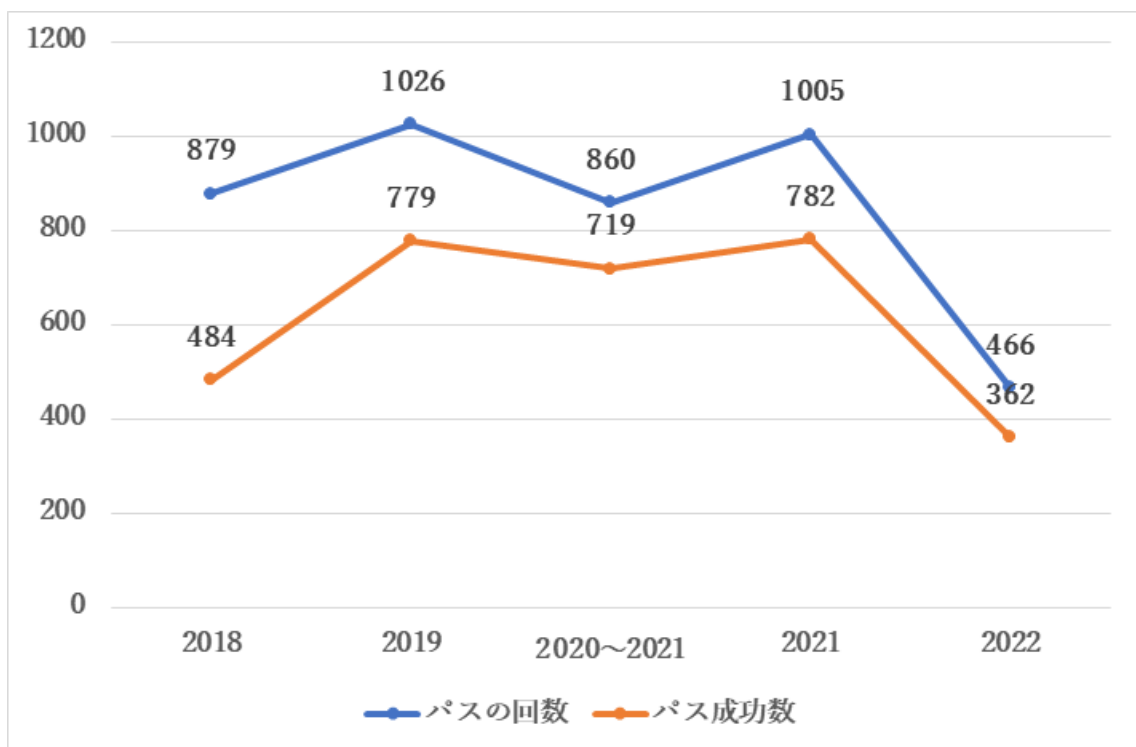


図 10 サンパオリ氏とプレーしたエヴェルソン選手の攻撃のスタッツ（Infogol より筆者作成）

GK エヴェルソン選手は 2019 年にサントス FC、2020 年からアトレチコ・ミネイロでプレーしているが、図 11 からわかるように、サンパオリ氏の元でプレーした期間の攻撃のスタッツは、パスの回数、成功数共に高い数字を示しており、攻撃に関わる回数が非常に多いことがわかった。

さらにサンパオリ氏の就任期間、2020 年から 2021 年にかけてエヴェルソン選手のパスの成功率が 84%、78%と 80%前後の数字を出しており、攻撃面での貢献度も非常に高いことが明らかになっている(図 17)。そして、それまで低迷していたアトレチコ・ミネイロはサンパオリ氏の攻撃的な戦術が浸透し、2021 年にはリーグ優勝をしていた(表 21)。

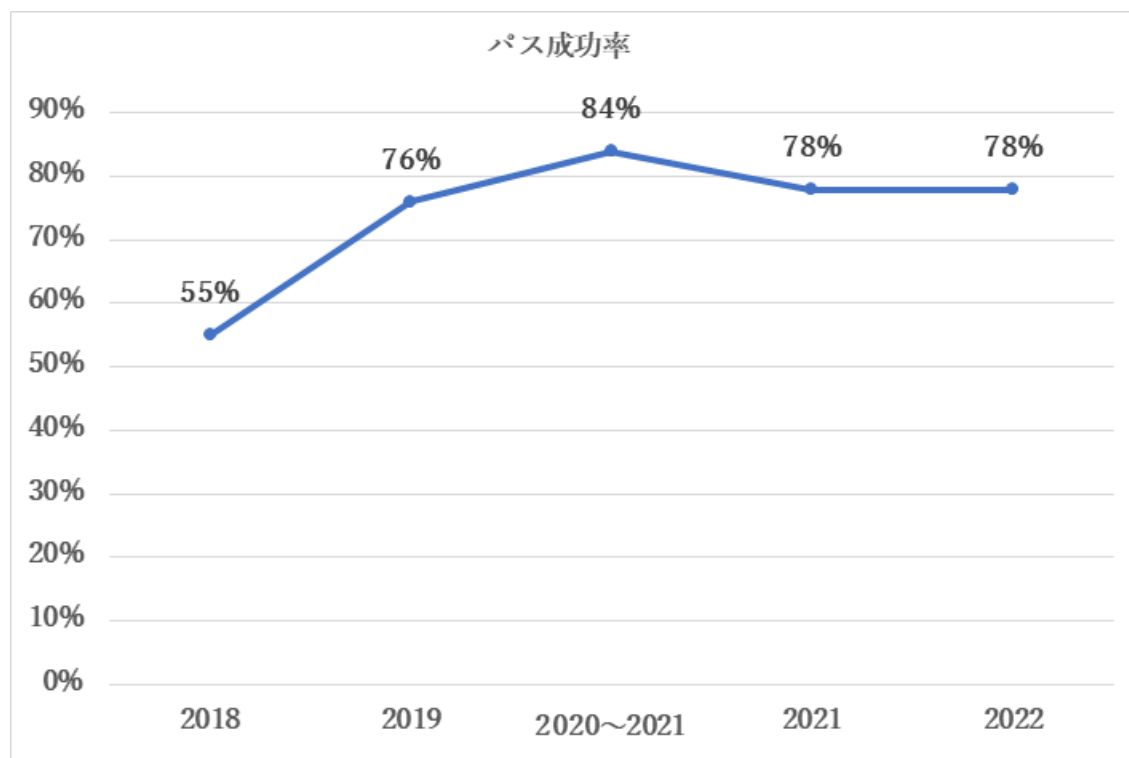


図 11 エヴェルソン選手の攻撃での貢献 (Infogol より筆者作成)

表 21 アトレチコ・ミネイロの国内リーグの成績

年度	アトレチコ・ミネイロ国内リーグ成績
2018	6 位
2019	13 位
2020~2021	3 位
2021	優勝
2022	4 位

第5項 アトレチコ・ミネイロの攻撃的な技術を高めるトレーニング内容

以下は、ダニエロ氏によって提供されたトレーニング映像の内容である。

まず図 12 はハーフライン付近からの長いロングボールに対し、DF4 枚(図 12 では人形)の背後をカバー、すなわちブレイクアウェイを強化するトレーニングである。ペナルティエリアの外であれば手を使わずにボールをクリア、ボールをキャッチした場合スローイング、又はロングキックで写真右上のミニゴールへパスをする。



図 12 DF ラインの背後をカバーするブレイクアウェイのトレーニングの様子

また図 13 は GK のポゼッショントレーニングの様子である。図 8、9 のトレーニングから、味方、相手選手の人数を増やし(GK を含めた 4 対 3)、更にピッチの幅を狭くしたポゼッション形式のトレーニングとなっている。ここではボールを持つ時間とスペースが無くなり、トレーニングの難易度が上がっている。ダニエロ氏は 4 局面(攻撃、攻撃→守備、守備、守備→攻撃)を意識した、試合で再現される実戦的なトレーニングを精力的に行っている。このように、GK 以外の複数の選手との関りを設定し、状況判断の伴うトレーニングを多用することによって、ブレイクアウェイやビルドアップなど GK が積極的に局面に関わる技術・判断力を向上させているのである。



図 13 GK のポゼッショントレーニングの様子

第3節 本章のまとめ

以上、本章ではブラジルの強豪、サントス FC とアトレチコ・ミネイロの GK の育成とトレーニング、クラブが求める GK のプレーモデルについてインタビューを行った。このインタビュー調査から以下の 5 つが明らかになった。

1 つ目は両チームのスカウティング事情とプレーモデルである。サントス FC では 8 歳のフットサルの導入から始まり 10 歳からの両立、アトレチコ・ミネイロでは 10 歳からすでにトップチームと同様のプレーモデルを求めるといふそれぞれの違いはあるが、GK についてのチームの基本的な考え方、「11 人目のフィールドプレイヤーとしての認識」「ゴールを守るだけでなく攻撃と守備に関わる必要性」は 2 クラブ共に共通していることが分かった。

2 つ目は GK の入り口を「楽しさ」から導入するポジティブな考え方と、選手に対する愛情である。GK になりたいという気持ちを芽生えさせるため、GK の楽しさや GK への愛情が育むような取り組みは、日本の GK の競技人口の増加、人気、普及の拡大の観点から、非常に参考になる。日本の GK 育成に於いて優秀な GK を発掘するためには、まずは GK が楽しい、プレーしたいと言える環境作り、そして GK の競技人口の拡大が最優先課題でもある。そしてサッカーだけでなく、一人の人間としての成長を促すため、メンターに依頼し子供達へのソフト面でのサポートをしているというサントス FC の取り組みについては、育成年代からクラブとして「選手を守る、人を守る」ことが徹底されており、選手に対する愛情が前提として環境を整えていることがインタビューから感じられた。このような取り組み、心のケアがあるからこそ、サントス FC がファン、サポーターから愛される要因であると考えられる。

3つ目はルール変更や戦術的変更に伴い、GKに要求されるタスクが複雑化する中、筆者が32年前に経験したGK個人を強化する反復系のトレーニングから、判断を伴った複数の選手が関わるトレーニングへと比重が変化してきたことである。現代サッカーに於けるGKの役割が、以前の「ゴールを守る」だけの考え方から、「11人目のフィールドプレイヤー」「攻撃と守備に積極的に関わる」といった志向に大きく変化している。その背景に於いて、ブラジルのGKがヨーロッパでも評価される要因としては、GKの基本的な技術の高さ、幼少期からフットサルで鍛えた足元の技術、育成現場での指導による戦術的理解の進歩の3つが考えられる。特に戦術的理解に於いては、トレーニングから監督とのコミュニケーションが大切であることを意味している。攻撃にどのように関わるのか。守備の組織をどのように構築するのか。監督とGKコーチの共同作業により選手の個人戦術を確立し、選手の戦術的進歩に繋げていくことが重要である。また、GKコーチがGKの専門的な知識だけでなく、サッカーの全体像を把握し戦術的な理解力を深めた上で、選手の成長が止まらないためのトレーニングの構築、アイデアと創造力の追求が今後求められていく。

4つ目はトレーニングにおける戦術的ピリオダイゼーションの導入などから分かるように、GKは他から切り離された孤高の存在ではなく、フィールド選手との関係性の中で組織の一員として適切な判断が下せるかが重要視されるようになってきていることである。当然ながらGKとして最も重要な「ゴールを守る」という軸を忘れてはならないが、フィールドプレイヤーとしての積極性、常に周囲の状況を把握した上で正しい判断を下す冷静さ、感情のコントロールからなる冷静沈着なリーダーシップといった内面的な強さが、これからのGKにとって必要不可欠になることが考えられる。

5つ目はトレーニングの変化、戦術的ピリオダイゼーションの理論から成る「攻撃」への志向である。「ゴールを守る」ことが最優先であることに変わりはないが、GKに攻撃としての機能を要求することによって、サンパオリ氏はチームを改革し、アトレチコ・ミネイロを国内タイトル獲得へと導いた。また興味深いのは、ダニエロ氏によれば攻撃が改善されたことによって守備も強化されたということである。GKの機能変化はチームの失点のパターンも変えたのである。ただ守るだけでなくボールを奪いに行く「攻撃的な守備」に変化を遂げたことに意味があり、「攻撃」の志向こそがサッカーの本質であることをサンパオリ氏の指導は証明している。現代サッカーに於けるGKは、守備、攻撃、全てのタスクをこなし、チームを勝利に導く司令塔としての存在へと変貌していくことが今後考えられる。

ワールドクラスのGK、アリソンとエデルソンを輩出したブラジルのGK育成システムは、GKに必要な守備の技術、フィジカルを大事にしているというダニエロ氏の言葉を前提とした上で、現代サッカーに適応する為のGKの戦術とトレーニングを着実に進化させていたのである。

第5章 結果3 欧州トップクラブにおける GK の指導

本章では、世界の最高峰で活躍する GK の指導がいかなるものか、またそこにどのようなフィロソフィーがあるかを、スペイン人指導者へガルシア氏のインタビューから考察していく。

第1節 ヨーロッパのトップクラブの GK 指導

ガルシア氏は、世界トップレベルの選手達と仕事をする上で以下の4つの項目が重要であると話した。①選手の起源とパーソナリティを知る、②どのような過程でそのレベルに辿り着いているかを知る、③選手の直近の情報を把握する、④シーズンを戦う上で、選手にそれぞれの立場と役割を伝達する、ということである。以上の4つに着目し、選手とのコミュニケーションを図り、お互いの関係を深めていく重要性を強調していた。

また監督の要求するプレーと、チームのプレーモデルをガルシア氏自身が理解し、2つの方法で GK 像を作り上げていくと述べた。1つ目は、シーズンを戦う上で目標を設定し、選手と共にトレーニングから構築する。2つ目は監督、チームのプレーモデルに則した選手の獲得である。そして、選手を獲得するケースであってもプレーモデルに適応するためのプロセスが必要であり、選手にはプレー理解とパーソナリティを求めるとガルシア氏は話していた。

発言の詳細を以下の表に示す。

表 22 ガルシア氏の発言内容 1

発言
川口：ガルシアさんは世界のトップクラブで指導してこられました。現代サッカーにおいて世界のトップで活躍する GK の条件はどのようなものでしょうか？
ガルシア：まず、世界レベルの GK とトレーニングするうえで見ていかなければならないことは、その選手がどういう起源を持ちどういうパーソナリティを持っているのかです。そしてこの選手にどのようにアプローチすることでこの選手がうまく機能するかを知ることが重要です。2つ目は選手とコーチがお互いに知り合ったうえで、その選手がどのような過程でそのレベルまでたどり着いてきたのかを知ることが重要です。それは彼らがどのように練習してきたのかとか、どういう経験を乗り越えてきたのかを知るべきです。3つ目として大事になるのは、このように彼らの起源やパーソナリティなどの情報を集めたうえで実際に彼らと対峙してやっていくわけですが、実際に今シーズンはペペ・レイナがチームに加

入してきたのですが、そうした選手の直近の情報を知るということも大事になってきます。私は実際に彼の直近の 15 試合フルマッチを分析し、彼に対してどういうことが必要とされるか、どういうトレーニングが必要になるかを最初のトレーニングのときにしっかり伝えられるようにしました。最後のポイントとして、実際に彼らを知った上でどのようにシーズンを送っていくかということが大事になるのですが、クラブや監督、コーチから彼らが現状どの位置にあるのかを正直に伝えることが重要だと思っています。GK としてプレーできるのは一人ですので、それぞれの選手がチームの中でどのような役割を持つかが決まってきます。それを正直に、誠実に GK たちに伝えるということをしなければなりません。そのうえで、試合に出場する選手がいますし、出場できずにサブに回る選手が出てきますけれども、彼らのパフォーマンスを最上限に引き上げるということを行っています。

世界レベルの GK と対峙するうえで重要なのはこの 4 つではないかと考えています。

川口：ガルシアさんが選手とのコミュニケーションを重要視しているということがわかりました。ではプレーの面において選手に求めていることはどのようなことでしょうか？

ガルシア：このレベルに達している GK についてはすでに技術が完成されていますので、技術面に対して要求することはほとんどありません。そんな中で一番大事と言えるのはプレー理解です。監督が求めるサッカーをどのようにプレーするかを理解してくれる力があるかどうか的大事なのです。つぎに重要なのはパーソナリティです。自分のパフォーマンスをチームのために最大限に発揮するというパーソナリティを持っているかどうか的大事だと考えます。

川口：そのプレー理解という部分を伝えるために、ガルシアさんは監督であるウナイ・エメリ氏(スペイン)と常にコミュニケーションを取られているのでしょうか？

ガルシア：私はずいぶん長くエメリ監督とは仕事をしていますが、その前であってもエスパニョールならエスパニョールの、セビージャならセビージャのそれぞれプレーモデルが各クラブに存在します。そうしたモデルを選手たちに伝えられるようまず自分自身がしっかり理解することが大事だと考えています。私が契約するクラブにすでにプレーモデルに近い GK が所属している場合もありますし、プレーモデルとは違うタイプの選手がいることもあります。そうした場合は選手たちがプレーモデルに適応する期間が重要になると考えています。選手、監督と話し合

いながら、適応する必要がある選手に関しては、そのプレーモデルを理解できるようにするトレーニングを作っていくことも重要になります。クラブや監督の提示するプレーモデルとすごく差がある選手がいる場合もあります。その場合、最終的にはこのようになってほしいという GK 像を提案したうえで一緒にトレーニングをしていき、選手たちにいろいろと要求をしていかなければならないときに、この時期にはこうなっていてほしいという目標を設定したうえで一緒にシーズンを過ごしていきます。そういった形を考えた時に二つ起こりうるのは、監督がこういう GK が欲しいというのをスカウトとも共有したうえで、それに近い GK を獲得するということからスタートできる場合もありますし、逆にクラブが事前に GK を獲得している場合もあります。後者の場合は先ほど話したようにプレーモデルに適応させていくというプロセスが必要になります。

また、ガルシア氏にサッカーの戦術的な進化と GK に関するルール変更に伴い、GK のトレーニング内容の変化について質問したところ、興味深い答えが返ってきた。ゲーム形式でのトレーニングだけでは試合で起こりうる戦術的な変化に対応する場面の現象が出てくいため、GK の頭に残る形で状況を再現し、GK のグループに分かれてトレーニングを行うというのである。GK の特性とメンタリティから、自分のことに集中し落ち着いてプレーする時間とプレー機会の確保が理由であった。以下がその発言である。

表 23 ガルシア氏の発言内容 2

発言
川口：現在のサッカーは戦術的にも進化し、GK に関わるルール変更が行われている中で、GK のタスクをめぐる変化をガルシアさんはどう捉えていますか？またそれに対応するためにトレーニングにも変化が生じましたか？
ガルシア：まず前提として、私たち GK コーチはテクニカルスタッフではあるけれども決して監督ではないのです。ルール変更その他でサッカーにおいて何が変わったのかをまず知ること、その変更によって GK のプレーにどのような影響が生じたのかを知り、それを論理的に組み立て直していく作業が必要です。このルールが変更されたときに、例えば攻撃や守備においてライン間のスペースが変わったりします。そうした変化が生じた時に自分たちがどのようにそうした状況に適応するかをしっかりと考えたうえで、それを GK トレーニングにどのような形で落とし込んでいくかを考えなければなりません。そういったトレーニング、メソッドの話になった時に、フィールドの選手と一緒にトレーニングする時間もありますし、GK だけでトレーニングする時間もあるのですが、ゲーム形式のトレーニン

グではそうした変化に対応する場面があまり現れないということもあり、セパレートのトレーニングで GK の頭に残る形でそういう状況を再現しています。そういう意味ではゲーム形式から切り離れた形で技術的なトレーニングをする必要があると考えています。また別の要素として、少しメンタル的な要素になると思うのですが、GK だけでトレーニングするという点に関して、GK は自分のことだけに集中できるのですごく落ち着いてプレーする時間が確保できます。しかしその一方、それはやはり切り取られた部分でのトレーニングなので、できるかぎりゲームに近い状況でトレーニングさせるということが重要です。

川口：GK のセパレートのトレーニングでもゲームに近い状況をつくるということでしょうか？

ガルシア：はい。そういう風にやるべきだと考えています。実際に私たちも各リーグを移動しているという状況ですが、シーズンに入る前にはそのリーグの傾向、つまりどのようなゴールが生まれていて、そのような失点が多いのか、攻守にわたってどのような状況が GK に生まれるのか、またそれがどのような頻度で生じるのかを調べることからスタートします。そういう要素を情報として集めたうえで、自分たちの戦い方、プレーモデルを準備して、それをトレーニングに落とし込んでいきます。それをするによって自分たちの理想であるプレーモデルと実際のリーグで要求される要素を合わせた形でトレーニングを行っていくことがセパレートのトレーニングでも重要だと考えます。

ガルシア氏に GK にとって攻撃と守備、どちらが重要であるか聞いたところ、GK の最も重要な役割はゴールを守ることであり、それぞれのポジションの特性を明確にプレーで示すことが重要であると話していた。戦術が進化し、今後求められるタスクが増えてもまずは「ゴールを守る」。守備の優先順位が高いことがガルシア氏の基本的な考え方であった。発言の詳細は以下である。

表 24 ガルシア氏の発言内容 3

発言
川口：現代サッカーでは GK に攻撃のタスクもすごく求められています。ガルシアさんは GK にとって攻撃の要素と守備の要素ではどちらが重要だと考えていますか。
ガルシア：私にとってその質問の答えは簡単です。GK の最も重要な役割が相手のシュートからゴールを守ることですから、守備が最も重要な要素と考えていいと思います。確かにルールの変更や戦術の変化によって数的優位をつくるために GK が攻撃に参加することを求められますが、GK は他の選手と異なるルール（手を使える）を持っているのですから、ゴールを守れるというのが一番重要な要素だと思います。例えば、ヨーロッパチャンピオンになったレアルマドリードのクルトワなども、最終的にチャンピオンになったのは彼自身が攻撃に関わったからではなく、しっかりと大事な場面でゴールを守ったからなのです。ただ、クラブによって GK に求める攻撃と守備の比率が変わってくるのも事実です。リーガエスパニョーラであれば、アトレチコとバルセロナを比較したときに、アトレチコのほうはよりディフェンスが優位性を持つでしょうし、バルセロナに行けばより攻撃のパーセンテージが上がるでしょう。
川口：ガルシアさんもチャンピオンズリーグを戦われてきましたが、戦術が進化していく中でもやはり GK の守備の重要性は変わらないということですね。
ガルシア：そこに関してはこれからも変わらないと思います。それは GK だけではなく例えば CB でも、今はよく攻撃を組み立てられる CB が最高だと評価されますが、基本的に一番重要なのはゴールを守れる GK であり、ゴールを守れる CB ではないかと思います。それはポジションの特性で、例えば FW であれば守ることよりもまずは点を取ることが優先されます。このように一つ一つのポジションにある特性というものが重要なのではないのでしょうか。そこにプラスアルファとしてそれをさらに補うとか、さらに良くするプレーができるのであればなお良いのではないかと思います。

各国様々なリーグとトップクラブでの指導実績があるガルシア氏に、ヨーロッパ各国に於ける GK の指導の現状と、異文化のなかで仕事をするために何が大切かを聞いた。技術的な部分では、スペインを例に挙げるとイタリア、ドイツ、フランスとそれぞれの国から情報を入手し、情報から得たノウハウを実践して指導するケースもあると述べた。また、各国のエリートカテゴリーに於いて指導をする上で大切なことは、まずはその国の文化と知識を理解し、適応する。そして文化的な部分からのアプローチで選手達との関係性を築

く、この2つであると述べた。そして GK も一つの環境だけでない多文化的な状況の中でトレーニングすることは、選手自身が成長するうえで重要であると話していた。以下が発言の詳細である。

表 25 ガルシア氏の発言内容 4

発言
川口：ガルシアさんは様々なリーグのトップクラブを経験されたわけですが、ヨーロッパ全体として GK に関する見方はどのようなものでしょうか？ ガルシア：私はいろいろな国で指導をしてきましたが、各国ともに GK に対する基本的な理解が根付いていたように思います。そこから GK のトレーニングが構築されているわけですが、例えばスペインであればいろいろな人が入り混じって形成されている国で、各国から来たコーチがそれぞれいろいろな情報を持っているのではないかと思います。技術的なことでいえば時にはイタリアから情報を入手しますが、それがドイツ経由の人もいれば、フランス経由の人もいます。エリートのカテゴリーでコーチをしていくのに重要なのは、GK がどのように考えられているのかについて、ピッチ内だけでなくその国の文化を理解すること、そしてそれに適応することが大事だと思います。この文化に関する知識を持っていないと、クラブや選手との文化的な衝突が起きますし、知識を持っていることでそれを回避することができます。実際にイタリア人 GK がチームにいた時に、技術的・戦術的に理解が異なることがありました。もしそうしたすれ違いを文化的な部分からのアプローチによって解決できるならばお互いにとって良いでしょう。自分自身の話で幸運だと思っているのは、異なる国のトップクラブで直接その現場に立つことができ、実体験を通じて学ぶことができたことです。また自分が一緒にトレーニングをしてきた GK たちも一つの環境ではなくて多人種の中で一緒にトレーニングをできたことは重要でした。私は彼らからも学び、またいろいろなところに行って情報を集めてきました。それは非常に良い経験になりました。

最後にガルシア氏が指導してきた選手のなかで、誰が最高の選手であったかを聞いた。多くの優秀な選手を指導してきたガルシア氏にとって特定の選手を挙げることは難しく、また、トップクラスの GK に共通している要素はプレッシャーに打ち勝つパーソナリティであると話していた。発言の詳細は表 20 に示した。

表 26 ガルシア氏の発言内容 5

発言
川口：ガルシアさんが指導、又は対戦した GK のなかで誰が最高の GK だと思いましたか？また世界最高の GK になるために必要な要素は何でしょうか？
ガルシア：一つ目は本当に難しい質問ですね（笑）。チェフであったり、ペペ・レイナであったり、エスパニョールのカメニといった素晴らしい選手と一緒にやってきましたが、この中で一人を選ぶことは困難ですね。それ以外の選手からも私はたくさんのことを学びましたし、コンテキストによって No.1 は変わっていくものです。二つ目の質問に関しては、前提としてチェルシーやバイエルン・ミュンヘンに行けば求められる GK 像というのは異なりますし、他の国にいても求められる GK 像というのは異なるでしょう。しかし共通しているのは、パーソナリティのところではないかと考えています。GK はつねに大きなプレッシャーのなかでプレーしなければならない存在で、そうしたプレッシャーがある中でも 1 試合、1 シーズンを通して継続的に高いパフォーマンスを発揮できるようなパーソナリティが必要です。エラーが起きないように自分のパフォーマンスを維持し続ける力が高いのもパーソナリティに関わる部分でしょう。また、ミスが起きた時でも、そのミスが次のパフォーマンスに影響しないようなメンタリティを持っている必要があります。そうしたパーソナリティの部分はどこに行っても共通して求められるものだと思います。

以上のガルシア氏のインタビューから、コーチの立場としてトップクラスの選手へアプローチするために必要なことは、選手達をより細かく事前に調査し、選手の起源、パーソナリティ、文化的な背景を理解した上でコミュニケーションを図ること、すなわち選手との関係性の構築であることが明らかになった。GK は試合に出場できる選手は 1 名であり、残りの選手達の試合出場機会は限定される。選手へのシビアな決断の伝達はコーチにとって最も過酷なミッションであることは理解できる。

そしてガルシア氏の GK のトレーニングについての考え方は、ゲームから切り離れた形で技術的なトレーニングを行う。その理由として、ゲーム形式では再現性が難しいこともあるが、GK は自分のことに集中し落ち着いてプレーする時間の確保が必要というガルシア氏の言葉から、GK に対する理解と選手への思いやりを感じた。

また現代サッカーに於いて GK は攻撃へのタスクも要求される時代であるが、ガルシア氏は GK にとって守備が最も重要なタスクであると語っていた。GK 出身である筆者にとって攻撃の重要性は理解しながらも、GK の存在意義を改めて気付かされる言葉であった。

サッカーは常に進化し、GK は攻撃と守備に於いて様々な能力が要求されている。その中で「ゴールを守る」という GK の本質は、勝つか負けるかで評価が下される厳しい世界に於いて最もシビアで重要な評価基準である。これが世界最高峰の舞台で戦うガルシア氏の答えであった。

第2節 本章のまとめ

本章では世界のトップクラブで活躍するスペイン人 GK 指導者のガルシア氏へのインタビューをもとに、今後世界のトップトップで戦うために必要な GK の素養、そしてそうした GK を指導していく方法について考察した。ガルシア氏のインタビューからは、世界のトップクラブの一流の GK を指導していくためには、その選手の詳細な分析と密なコミュニケーション、さらに各リーグの特徴を把握しながら監督のフィロソフィーを現場に落とし込んでいく作業が必要であることが明らかになった。各国のリーグはそれぞれに特有のプレー傾向および失点パターンを持つため、技術的にはほぼ完成された選手を抱えるビッグクラブにおいて必要なのは、リーグの傾向と監督のフィロソフィーを個々の選手たちに適応させるようなトレーニングであった。こうした視点は現代の日本サッカーではまだ十分に浸透しているといえないだろう。

第6章 結果4 アルゼンチンにおける GK の指導

第1節 アルゼンチンの GK の育成環境とフィジョール氏の育

成年代の経験

フィジョール氏は元々ボランチの選手であり、14歳から GK を始めた。自身の経験から GK を始める年齢は特に重要ではないという。そして当時 GK コーチがいない環境であったが、トップチームの選手のプレーを見て分析し、真似をしたことで成長できたと語る。身近にいた模範となる選手の存在が、フィジョール氏の「観察力」に大きな影響を与えたのであろう。また、アルゼンチンのサッカーの強さの秘訣はポトレイロであるという話があった。ポトレイロとはアルゼンチンの草サッカーを意味し、10歳の子どもからおじさんまで幅広い年齢の人々が一緒にプレーするものだ。そこにはラインもなければ、ゴールはそこにあるもの、例えば靴を置いてつくる。ブラジルのストリートサッカーと並び、ポトレイロは創造性を育む原点となっているという。以下が発言の詳細である。

表 27 フィジョール氏の発言内容 1

発言
川口：まず、現役時代のフィジョールさんは1対1が非常に強いということを何度も映像で見えていて、オズワルド・アルディレスさん（横浜F・マリノス時代の監督）からもフィジョールさんの1対1を学べと言われていたのですが、それは自分で1対1のやり方を考え出したのか、それとも誰かに指導されたのですか？
フィジョール：ひとつは、持って生まれたものはあると思います。もう一つは、私自身が1対1の対応が好きで得意としていたということです。プレーしているときにFWが来るのを待つのではなくて、FWに対して自分から向かっていくことでFWから見えるゴールが小さくなるということを学習していきました。
川口：当時は、FWに向かっていくときに体を横に倒すというのが普通のやり方だったと思うのですが、フィジョールさんは倒れずにそのままの体勢で前に出ていました。それは自分で見出したのですか？それともトレーニングで身に付けたのでしょうか？
フィジョール：私はユース年代ではキルメスACでプレーしていて、その時にトップチームのGKのプレーをよく見ていました。他のGKを見ていた時に気づいたの

が、1対1のときに顔を横に逸らしてはいけないこと、目を離さないこと、さらにぎりぎりまで寄ったらそのあとは飛び込まずにつま先立ちで相手の反応を待つということ、でした。

川口：フィジョールさんのプレーは今のブロッキングというテクニックに繋がっていると思います。今の GK の 1 対 1 の技術はフィジョールさんがパイオニアなのかなと考えています。ところでフィジョールさんは GK を始める適性年齢は何歳ぐらいだと考えますか？

フィジョール：年齢は関係ないと思います。私も 14 歳までは 5 番のポジション（ボランチ）でプレーしていました。順番で GK を回しているときに自分の番が来て、そこでプレーしてみて最終的に自分が GK でプレーすることを選びました。

川口：14 歳までフィールドプレイヤーだったことでいい影響はありましたか？

フィジョール：もちろんありました。というのも、私は良い意味でフィールドプレイヤーを信用しなくなりました。フィールドプレイヤーは必ず間違いを犯すのです。その時に自分がどこにいて何をするかが大事なのです。

川口：先ほどおっしゃった何歳からでもいいというのは、アルゼンチン全体がそういう感じなのですか？

フィジョール：アルゼンチン全体がそうということもありますが、私の場合は小さいときから年上のプレーヤーに混ざってプレーしていて、その時にみな勝利を貪欲に目指していました。だからそこでは年齢など関係なかったのです。ポトレイロはアルゼンチンサッカーのエッセンスなのです。ポトレイロはみんなが必ず通る道で、プロサッカーに入る前の土台を養ってくれます。そこにはコーチも監督もいません。それぞれの選手が自分で考えてプレーするのです。ポトレイロで幅広い年齢の選手と一緒にプレーすることが大事なのです。というのも、プロになる前にはユースチームに入らなければならないのですが、自分と同じ年齢の選手と競う上で、年上とやった経験が役に立つのです。

第2節 アルゼンチンの GK 育成内容

現在、アルゼンチンの GK 育成システムには、GK 専門スクール、そして育成のためのカリキュラムがあり、7 歳から 8 歳の子供達を通える GK スクールも増加傾向にあるとい

う。チーム全体のトレーニングの流れとしては、GK に特化した個別トレーニングの割合が多く、最後のゲーム形式のトレーニングまでは、フィールドプレイヤーと分かれて GK のトレーニングを行っている。また、現在ヨーロッパで活躍するアルゼンチン人 GK が増えている要因としては、1990 年代以降に実際プロとして活躍した選手による指導と GK コーチの地位の確立、近年設立された GK コーチ専用のライセンス制度の充実が理由であるとフィジョール氏は話していた。発言の詳細は表 23 に示す。

表 28 フィジヨール氏の発言内容 3

発言
川口：GK の育成についてお尋ねします。現代サッカーでは GK のタスクが複雑化していますが、指導方法ではどのような変化があったのでしょうか？また、システムティックな指導方針のようなものはアルゼンチンにあるのでしょうか？
フィジヨール：私は 25 年間プロでやっていたのですが、一度も GK コーチに指導を受けたことはありません。そもそも GK コーチという役職がなかったのです。私は引退した後に GK コーチになったのですが、私の時代にはありませんでした。現在では GK 専用のスクールもあり、育成のカリキュラムもあります。7 歳から 8 歳の子どもたちから通えるスクールも増えています。
川口：現代サッカー、特にヨーロッパでは GK の足元の技術やチーム戦術の理解が強調される傾向があります。アルゼンチンでもそうした流れに向かっているのでしょうか。それともシュートストップやクロス対応などゴールを守るという部分をやはり強調しているのでしょうか？
フィジヨール：アルゼンチンではフィールドの選手と GK が別々にトレーニングすることが多いです。トレーニングの最後のゲームで合流するという形です。
川口：戦術的な要求が高いヨーロッパのリーグでもアルゼンチンの GK が活躍しています。これはアルゼンチンの育成が上手くいっているということでしょうか？
フィジヨール：1990 年代以降、実際にプロとしてプレーした GK が引退後に GK コーチという役職をつけてもらうようになりました。そうしたコーチが育成に関わることで、アルゼンチンの育成のレベルが上がったのです。いまでは GK コーチ専用のライセンス制度もあります。
川口：最後にフィジヨールさんは GK の能力としてどの要素を重要視しますか？フィジカルであるとか、技術であるとか。
フィジヨール：私は GK を評価するとき、試合内容を見るのではなく、ずっと GK の動きだけを見ています。オンのときも、オフのときもです。基本的にパーソナリティの部分や立ち姿です。

自国開催の W 杯優勝経験のあるフィジョール氏の言葉には、揺るぎない自信と、自身の GK 哲学に対する誇りを感じた。W 杯優勝という偉業を達成する

ためには、筆者の想像を絶するほどのプレッシャーに耐えられる強さと、自らの弱さに打ち勝つパーソナリティ、戦うための準備とチームの強い結束が必要であるとフィジョール氏は力説していた。また育成については、GK 専用のスクールが設立されているように、アルゼンチンでも GK の普及が進み、指導環境が整ってきている。その結果、優秀な GK をヨーロッパのクラブへと輩出している。やはり、普及と育成の充実が優秀な人材を発掘するうえで欠かせない作業であることは言うまでもない。また、その人材がフィジョール氏のように見て学び、物事を吸収できる柔軟性が備わっていれば、より優秀な人材が出現することも考えられる。

最後にフィジョール氏の「試合内容を見るのではなく、GK の動き、そして立ち姿を見ている」という話があった。今後は、筆者も GK を観察する上で、試合の中での GK の「立ち姿」に注目していきたい。

第 3 節 1978 年 W 杯アルゼンチン大会での優勝の経験

1978 年、地元アルゼンチンで開催された W 杯でフィジョール氏は優勝チームの GK として歴史にその名を残す。当時のアルゼンチン代表は国内でプレーしている選手が多く、国際大会での経験と実績が不足していた。1970 年に W 杯出場を逃したアルゼンチン代表は、国内リーグでの実績を評価されたセサル・ルイス・メノッティが代表監督に就任する。アルゼンチン指導者の頭脳と言われ、現在母国に指導者養成学校を設立しているメノッティ氏は、当時のヨーロッパの戦術を研究し、チームとしての戦い方を選手達に提示した。チームに方向性を示し、勇気と自信を植え付けたことで、アルゼンチン代表は W 杯で快進撃を続ける。そして、アルゼンチン国民の大きな期待を背負う中、選手達は不安とプレッシャーに打ち勝ち、栄冠を勝ち取ることができたとフィジョール氏は語った。以下が発言の詳細である。

表 29 フィジョール氏の発言内容 2

発言
川口：これまで私自身もアルゼンチン代表と試合をし、また先日 U19 代表のコーチとして U19 アルゼンチン代表チームを見た時にも思ったのですが、アルゼンチンの選手は個人の技術がとても優れていて、状況に応じて判断やテクニックを変えることができると同時に、チームとしてもオーガナイズされていると感じます。それもポトレイロで培われたもののでしょうか？
フィジョール：創造性や個人の技術に関してはそうだと思いますが、アルゼンチンの代

表チームがよくオーガナイズされているかという疑問を感じます。私はアルゼンチンの悪い時代を過ごしてきました。チームにリーダーシップのある選手がおらず、選手が個々にプレーしていました。1970年にアルゼンチンはW杯出場を逃します。そこで、セサル・ルイス・メノッティがヨーロッパでシステムやフォーメーションの研究をし、代表監督になりました。私はメノッティに勇気をもらいました。私たちはやれるんだ、と。彼にはチームをオーガナイズする能力があり、その上でメンタリティも植え付けてもらいました。

川口：アルゼンチンは良い指導者をたくさん輩出していますが、メノッティさんの影響が大きいのでしょうか？

フィジョール：そうですね。アルゼンチンが世界で認められたのは1978年のW杯を優勝してからですが、まさにメノッティがアルゼンチンの脳みそとしてコンセプトを整えた上で指揮を執ってくれたからこそここまでこれたんだと思います。

川口：メノッティ監督で臨んだ1978年W杯は地元開催でフィジョールさんも大きな重圧があったと思うのですが、こういったメンタリティで大会に望まれましたか？

フィジョール：当時のアルゼンチン代表はほとんどが国内でプレーしていた選手で、みな大きな不安とプレッシャーを感じていました。しかしメノッティは私たちを奮い立たせてくれました。自分たちが一番であると。私たちは彼の言葉をすべて信じていました。

第4節 本章まとめ

フィジョール氏のインタビューから明らかになったのは、少年期に型にはめた指導にこだわるのではなく、より柔軟なサッカー経験を与えることがアルゼンチンの強みになっているということだった。ポトレイロという草サッカーの環境では自分より年上の人々が本気で勝利を目指す中に混ざってプレーしなければならない。その中でどのようにすれば良いプレーができるのかを各自が工夫し、時には周りの選手を見てその技を盗むなどして生き残ってきたのである。GKコーチという役職自体が比較的最近確立されたこともあり、ブラジルやヨーロッパのトレーニング方法と比較すると必ずしも最先端を走っているとは言えないが、少年期に柔軟な創造性を育むことによって、その後の伸びしろを大きくしていると思われる。以上、両者のインタビューからは今後の日本のGK育成、そしてGK指導の発展にとって重要な示唆を与えてくれた。

第7章 結果5 筆者のPK戦の経験

2022年W杯カタール大会において日本はPK戦の末クロアチアに敗れ、目標としていたベスト8にあと一步のところで届かなかった。遡れば2010年南アフリカ大会においても、ベスト8進出を賭けたパラグアイ戦にPK戦で敗退している。カタール大会では決勝を含めた5試合がPK戦での決着であったように、国際大会で結果を残すためにはキッカーだけではなくGKもまたPKストップの技術をあげていかなければならないだろう。本章では筆者自身が日本代表として経験したPKを客観的に分析することを通じて、今後国際大会で活躍するであろう日本の若きGKたちが身に付けておくべき技術や心構えを論じていく。さらに、育成年代の選手たちにPK戦の経験を提供する方策についても述べていきたい。

第1節 国際大会におけるPKの重要性

本章では以下、筆者がプレーヤーとして経験した2004年アジア杯ヨルダン戦、2006年W杯ドイツ大会グループリーグ・クロアチア戦、そして2007年アジア杯オーストラリア戦、またコーチとして経験した2021年東京オリンピック・ニュージーランド戦（GKは谷晃生）について論じる。なおドイツW杯クロアチア戦は、PK戦ではなくプレー中のPKである。ここであらかじめ注意しておく点がある。それは、主要な国際大会における代表戦ではスタッフによる相手チームの事前の調査が行われ、PKに関する何かしらの情報が入手され、GKに渡されるということである。最終的にそれらの情報に依拠するかどうかは選手の判断であるが、そうした事前のデータ収集もPK戦の勝敗を決める重要な要素の一つであることは間違いない。したがって以下では、各大会についてまず相手チームの情報がどのようなものであったのかを示したうえで、筆者および谷がどのようにPKをストップすることができたかを分析していく。

第2節 2004年アジア杯ヨルダン戦

2004年7月、中国・重慶で行われたアジア杯準々決勝で日本代表はヨルダンと対戦した。試合は延長戦でも決着がつかず1-1のままPK戦にもつれ込む。PK戦では両チーム3人のキックが終了した時点で1-3とヨルダンがリードしていた。ここから筆者は相手選手のミスも含め4本連続で相手にゴールを許さなかった。4本のうち2本を止めることに成功し、最終スコア4-3と勝利を手にした。スタジアムのアウェイの雰囲気、中国内陸部の高温多湿、ピッチサイドの変更と、集中力の維持を妨げる様々な要素が背景にありながら筆者の記憶に残るパフォーマンスが発揮された。

まずこのPK戦に関しては、ヨルダンの情報が事前に入手されていなかった。中二日と

いう慌ただしい日程のなかで PK 戦を戦うという部分までスカウティングの準備ができていなかったと考えられる。したがって GK としては全く情報がない状態であったが、試合中に相手選手の個々の特徴を掴み、パワー系、テクニック系といった見極めはしていた。パワー系の選手は PK でも強いシュートを蹴る場合が多く、逆にテクニック系の選手は GK の逆を取るようなシュートが多いからである。

この PK 戦では最初の 2 人に関しては自分の納得のいくパフォーマンスを出すことができなかった。代表に召集されるのは 2002 年日韓 W 杯以来であり、さらに久しぶりの PK 戦。しかも当時は反日ムードが高まっていた重慶の観客の雰囲気飲まれて、相手どうこうではなく自分自身の気持ちが PK 戦に入り切れていなかったのだと感じる。転機が訪れたのは 3 人目であった。ピッチコンディションが酷く、3 人目からピッチサイドが変更されたことがきっかけとなり、3 人目のシュートに対して下半身の力がぐっと入った感覚があった。シュートコースとは反対に飛んでいたものの、そこで何か重たいものが取れた感覚があったのである。状況としては依然ピンチだったのだが、そこで自分自身にフォーカスすることができたのである。

4 人目からは入れられたら終わりなので、先に動いたら負けだと判断し、ボールに反応しようと切り替えた。4 人目のキッカーを前にした時の心理状況は、いわゆる「ゾーン」と言われるものだったと考えられる。まず、それまで筆者にプレッシャーを与えていた周りの音が全く聞こえなかった。そして PK のときはボールに集中するようにとジーコ監督から指示を受けていたのだが、その時はボールに集中しているにもかかわらず、ボールもキッカーも観客もすべてが同じ一枚の絵に見えたのである。そして不思議なことに次に起こることが予測できたのだ。その結果、PK ではほとんど止められることがないとされる上へのシュートを指先で弾くことができた。ボールはクロスバーに当たりゴールを外れた。そこから先は同じような心理状態で PK 戦に入れていて、後からビデオを見ると相手選手が動揺しているのがわかった。

したがってこのヨルダン戦の PK は情報に頼るのでもなく、また駆け引きなどを用いて相手を揺さぶろうとするのでもなく、ただ極限状況の中で自分自身に意識を向けて集中力を高めたと分析できる。今回のカタール W 杯ではアルゼンチンのマルチネスが相手を揺さぶろうとしていたが、筆者はそういうタイプではない。むしろクロアチアの GK ドミニク・リバコビッチは筆者と似たタイプだと思われる。意識を相手に向けるのではなく、自分に向けて集中力を高めるタイプである。

第 3 節 2006 年 W 杯クロアチア戦

2006 年 6 月、W 杯ドイツ大会グループリーグ第 2 戦のクロアチア戦では前半 21 分に PK を与えた。筆者はその PK をストップし、結果的に勝ち点 1 を獲得することができた。事前に情報収集があり、試合中の PK はほぼダリヨ・スルナ選手が蹴るということ、

またその資料映像を多く見ていた。ある程度の傾向は掴めていたが、左に蹴るのが 50～60%程度だったので、真ん中には蹴らないとしても実際には左右どちらに蹴るかは分からないと言われていた。本番ではスルナが（GK の）左に蹴った映像がフラッシュバックし、直観的に左に動く判断をした。スルナのキックが速いという情報もあったので、予測して先に動き出さないと止めることはできないと考えていた。実際にスルナのシュートは強く良いコースに来たが、先に左にステップを踏んだことでリーチを出すことができ止めることができた。PK においてあらかじめデータを提示された場合、そのデータを信頼するのかあるいは直観的に判断するのかは GK しだいであるが、極限状況の中ではデータは GK の支えにもなると感じた事例である。

第 4 節 2007 年アジア杯オーストラリア戦

2007 年 7 月、ベトナムで行われた同じくアジア杯準々決勝。相手は前年の 2006 年 W 杯ドイツ大会において 1-3 と逆転負けを喫した因縁の相手である。試合は 1-1 のまま PK 戦にもつれ込む。トータル 5 本の内、最初の 2 本をストップし 4-3 で勝利することができた。この試合に向け事前にオーストラリアの選手の蹴る方向、誰が蹴るといった情報は入手されていた。オーストラリアにヨーロッパで活躍する選手がいて、彼らの PK の映像を試合前日に見ることができた。特にシュートを止めた 2 本のセーブは事前の情報を得た効果が表れた。

しかしながら、データがあれば PK を止められるというわけではない。このレベルの選手になればシュートのコースも強さも一流であり、予測したうえでさらに技術や瞬発力が必要なのである。まず、筆者の経験から PK は必ずしも GK のサイズの問題ではないと考えられる。筆者は 180 cm の身長であるが国際舞台で何度も PK を止めてきたし、また 1994 年の W 杯ではメキシコ代表のホルヘ・カンポスが 168 cm の身長にもかかわらずブルガリア戦で PK を止めている。したがって、重要なのは跳躍力を引き出す技術なのである。

第 5 節 2021 年オリンピック東京大会

2021 年 7 月、1 年の延期を経て開催されたオリンピック東京大会準々決勝において、日本代表は PK 戦の末にニュージーランド代表を下した。筆者は GK コーチとしてこの大会に参加し、選手たちを指導・サポートした。ニュージーランド戦では湘南ベルマーレに所属（当時）する谷晃生選手がゴールマウスを守った。谷は 2 人目のシュートをセーブし、PK 戦の勝利に貢献した。この試合については事前にニュージーランドの選手全員の PK の傾向を Wyscout というサイトで調べ、そのデータを谷に提供するためにメモを用意した。しかし実際の PK 戦では谷が興奮状態だったため、そのメモは使わず自分の判断で戦

うことになった。

ここで、相手に関するデータへの依存ではなく、谷は自分から敢えてそれを取り払ったといえるかもしれない。むしろ谷は、本番で自分自身に集中することを選んだといえるだろう。非常に興味深いことだが、筆者が大会に向けて事前に作成した谷選手用のモチベーション映像には彼が PK ストップをしたシーンが含まれており、それが本大会の PK ストップと瓜二つのプレーだったのである。ここで言えるのは、指導者として提供すべきは、相手に意識を向ける情報と自分自身に意識を集中させる情報の両方が必要だということではないだろうか。相手の特徴を事前に把握して GK に準備をさせること、その一方で自分自身のベストパフォーマンスを出すことに集中させること、指導者はこのどちらにも配慮しなければならない。

第6節 本章まとめ

育成年代においては相手の情報をスカウティングするということが日常的に行われるとは考えにくい。したがって、技術やフィジカル、そしてメンタルの部分の強化を行っていく必要がある。

第1項技術・フィジカル

技術的な面でまず重要なのは飛ぶ方向である。まず GK はシュートの角度を減らすために体を前に出すが、前に踏み込んで、さらに斜め前に飛ぶことによって角度を減らすことができる。さらにそのとき片足をライン上に残して（ルール上どちらかの足が残っていれば良い）、もう片方の足で前に踏み込むことで跳躍力を出すことができる。2022 年 W 杯におけるクロアチアの GK リバコビッチは PK で非常にリーチが長かった。その理由は、彼は股関節が柔らかく、膝を深く曲げて深く踏み込み、低いダイビングができていたからである。片足だけで跳ぶのではなく、踏み込み足と蹴り足の両足の力を使って飛ぶことでリーチが出るのだ。こうした基本的な技術の習得を進めていかなければならないだろう。

また、現在のルールでは GK はゴールライン上で動くことができる。動くことによって相手キッカーに揺さぶりをかけることができるが、逆に自分自身の集中力という部分ではマイナスに働くかもしれない。したがって動くか動かないかは GK のパーソナリティによるだろう。

第2項メンタル

上述のように、メンタル面で重要なのはまず相手に意識を向けるのか、自分に意識を向けるのかという部分だと考えられる。駆け引きや揺さぶりなどで相手のミスを誘うという戦略もあるだろうし、また筆者のように自分自身の集中力を高めることを優先するというケースもあるだろう。いずれにしても、国際大会での勝敗がかかった PK 戦ともなれば、GK もキッカーもともに心理的には極限状態である。例えば 2021 年のユーロ 2020 決勝の

PK戦ではイングランド代表の3人目マーカス・ラッシュフォードが失敗した後、立て続けに4人目、5人目が失敗した。さらに、2022年W杯決勝のPK戦においてアルゼンチンの一人目メッシはパネンカに近いようなコロコロのキックを真ん中に決めたが、フランス代表GKウーゴ・ロリスはそれによって揺さぶられ、その後のパフォーマンスに影響があったのではないかとと思われる。

第3項一発勝負のPK戦を経験させる試み

2022年12月、カタールW杯でのPK戦敗退を踏まえたJFAの要請により、水戸市で開催されたIBARAKI Next Generation Cupでは、90分の後に試合結果に関係なくPK戦を行い、勝ったチームに勝点1が付与されるレギュレーションが導入された(U18日本代表が出場)。筆者はU18日本代表のGKコーチとしてこの大会に参加したが、一つのフェスティバルの企画としては興味深く感じた一方で、ここでの経験が実際の緊迫した状況で活かせるのかはまだ判断しかねる部分がある。その理由としては、まず観客が少なかったために緊迫した雰囲気ができなかったことがあげられる。またU18代表に関していえば相手が大学生だったため90分で疲弊し、PK戦を戦う余力が残っていなかった。さらに今回の対戦相手だった関東大学選抜や茨城国体選抜は失うものがなくノープレッシャーだったため、シュートも簡単に決めることができたのかもしれない。

したがって今後は緊迫感のあるシチュエーション作りを工夫しながら、こうした取り組みを拡大していくことが必要となるだろう。

筆者も高校時代の高校選手権におけるPK戦や、1995年のJリーグにおけるPK戦の経験が、2004年アジア杯でのPK戦に活かされたと感じている。高校選手権では、1993年度全国優勝したが、県予選からPK戦対応が求められ、準決勝鹿児島実業戦はPK戦で勝利した。筆者がJリーグに初出場した1995年はリーグ戦でもPK戦が行われ、クラブの練習においてもPK戦の練習が行われていた。このような環境が筆者の糧になっていたと思われる。

国際大会で今後日本代表が好成績を収めるためのPK指導ということを最終的に考えるのであれば、育成年代からある程度の緊張感を伴ったPK戦の経験を積んでいくことが重要となるだろう。

第8章 総合考察 新たなトレーニングモデルの提案

JFA は今後の選手育成と強化の指針として、日本サッカー協会ユースダイレクター影山雅永氏が主導して作成した Japan's Way を 2022 年に発表している。自分の武器 (Individuality) を持ち、様々な状況でチームの為に生かすことができる選手をテーマに各ポジションについての望まれる選手像を掲げている。GK の分野に於いても JFA・GK プロジェクトリーダーの川俣則幸氏が以下のような項目を提示している (図 14)。



図 14 JFA 作成の Japan's Way - GK に求められる選手像

この図式では、GK に望まれる能力を戦術、テクニックスキル、メンタル、フィジカルの4種類に分類し、さらにそれぞれに求められている重要なプレー項目を示している。しかしながら本論で論じてきたように、現在の日本サッカーのGK育成において必要とされているのは、こうした目標を具体的にどのように達成していくのかという方法論の部分である。これまで示してきたように、本論の目的はブラジルをはじめとする世界の強豪国のGKをめぐるフィロソフィーと具体的なトレーニング方法を調査することによって、今後の日本サッカーにおけるGK育成の具体的な方法論を提示することにある。本章ではこれまでの各章で明らかになった知見を整理し、最後に具体的なトレーニングモデルを提示したい。

第1節 GK 育成・指導のポイント

以下、本論で明らかになった GK 育成・指導の要点を整理する。

1. 世界の強豪国の GK のトレーニングには直接・間接的に戦術的ピリオダイゼーション理論の影響が見られる。GK がビルドアップ他の攻撃的機能を果たす役割を求められる中で、単に足元の技術というのではなく、複雑な状況判断を伴った技術の使用を身につける必要がある。

2. したがって、まずはフィールドプレイヤーから切り離れたゴールキーパー単独の技術練習については、フィジカル強化と技術習得が同時にできるような短時間で高強度の練習内容に切り替えることが必要となる。そうすることでフィールドプレイヤーと合同でのトレーニング時間を確保することができる。

3. 戦術的ピリオダイゼーションを土台としたトレーニングにおいては、複雑性の調整が重要となる。アトレチコ・ミネイロのトレーニングでも行われていたように、複数の相手選手からプレッシャーをかけられる中で複数のパスコースから最適なものを選択するといった、「脳への負荷」を考慮してトレーニングを構築することが必要である。

以上の結果を持って、以下に育成年代への取り組みの指針を示したい。ジュニア年代では FP と同様に足元の技術を獲得しておく必要があり、ジュニアユースでは GK 特有の技術習得と基本動作の獲得、ユースでは戦術理解とフィジカル強化といった段階的な指導を行うことが望ましいと考える。このような観点から、理想的なトレーニングモデルを提案する。

第2節 新たな練習内容の提案

以下に毎週末に試合が行われると想定した1週間の練習メニューを提案する。

第1項練習のスケジュール(曜日別)

表 30 練習のスケジュール(曜日別)

月	火	水	木	金	土・日
オフ	GK練習(60分) 試合形式(30分)	GK練習(30分) GK・FP合同練習 (30分) 試合形式(30分)	試合形式 (90分)	セットプレー 戦術確認 (90分)	試合

週末の試合に向けて火曜日に GK 専用の練習が 60 分の日、水曜日が 30 分の日の 2 種類の練習メニューが必要である。

第2項GK 専用練習(火曜日)

火曜日を想定したメニューが表 31 である。GK 専用の 60 分メニューであるが、以下の工夫により新たな GK の役割に対応した練習内容を追加しても従来の練習時間は変わらない。

①従来長めにとっていた準備の段階に別途行っていた一部の筋トレを組み込むことや②シュートストップにおいて実践形式に近い高強度の練習内容に変えることで、技術とフィジカルの両面の練習を可能とする。これにより従来行っていた基礎的な筋トレやフィジカルの時間を削減でき、攻撃への切替えのためのボールキャッチからスローイングやロングフィードを行うビルドアップの技術練習の時間を確保することが可能となる。

表 31 GK 専用練習メニュー(火曜日)

従来の練習内容	時間	新たな練習内容
【準備(20分)】 ストレッチ ウォーミングアップ	5	【準備(15分)】 ウォーミングアップ 筋力トレーニング
	10	
	15	【ボール有りフィジカル(15分)】 ステップからのキャッチング
	20	
【ボール無しフィジカル(15分)】 筋力トレーニング 器具を使ったジャンプ・スプリント	25	
	30	【シュートストップ(15分)】 連続のシュートストップ 様々な距離・角度からのシュートストップ
	35	
【ボール有りフィジカル(10分)】 ステップからのキャッチング シュートストップ	40	
	45	
【シュートストップ(10分)】 シュートストップ	50	【ポゼッション(10分)】 <u>GK同士のポゼッション</u>
	55	
【クールダウン(5分)】	60	【クールダウン(5分)】
合計60分	合計	合計60分

第3項全体練習とGK専用練習(水曜日)

次に水曜日を想定し90分の練習時間を提案する。表32のようにそのうち30分がGK専用の練習、60分が全体練習である。海外では全体トレーニングが始まる前にGKに特化した練習を行い、テクニック、フィジカル、戦術的な要素を取り入れたトレーニングを行った後に、全体練習ではFPと同様の攻撃・守備のトレーニング、ゲーム形式の戦術的なトレーニングを行っているチームもあると聞いている。そこで、全体練習の前に30分のGK専用練習を次の通り考えた。

30分のGK専用練習では、ボールを使わないフィジカルトレーニングは行わず、GKの基本技術の確認とシュートストップ等の高強度のトレーニングを重視し、最後にGK同士でポジションの練習を行う。60分の全体練習では、①8対7の数的優位な状態でGKに対し相手選手からのハイプレッシャーがかかる状態でのビルドアップの練習(図15)や、②5対5のシュートゲームでは攻撃の局面ではGKを起点としたポジションやビルドアップ、守備の局面では相手からシュートを受けるような攻守の展開の早い状況を想定した実践形式の練習を行う内容とした。(図16)

表 32 GK専用練習と全体練習のメニュー(水曜日)

	項目	時間	内容
GK専用 (30分)	準備	3分	ストレッチ、ウォーミングアップ、
	技術練習(攻撃・守備)	10分	パス、コントロール、キック・キャッチング、セービング
	試合状況(守備)	12分	シュートストップ、1対1、クロスに対する守り方
	攻撃	5分	GK同士のポジション、キャッチからのスローイング&キック
全体練習 (60分)	ポジション	15分	【GKを含めた8対7のビルドアップのトレーニング】 相手FWにGKがハイプレッシャーをかけられた状態で ボールポジションを行う練習
	ポジション シュートストップ	15分	【5対5のシュートゲーム】 2分ローテーションで ボールポジションとシュートストップを行う
	ゲーム	30分	11対11のゲーム

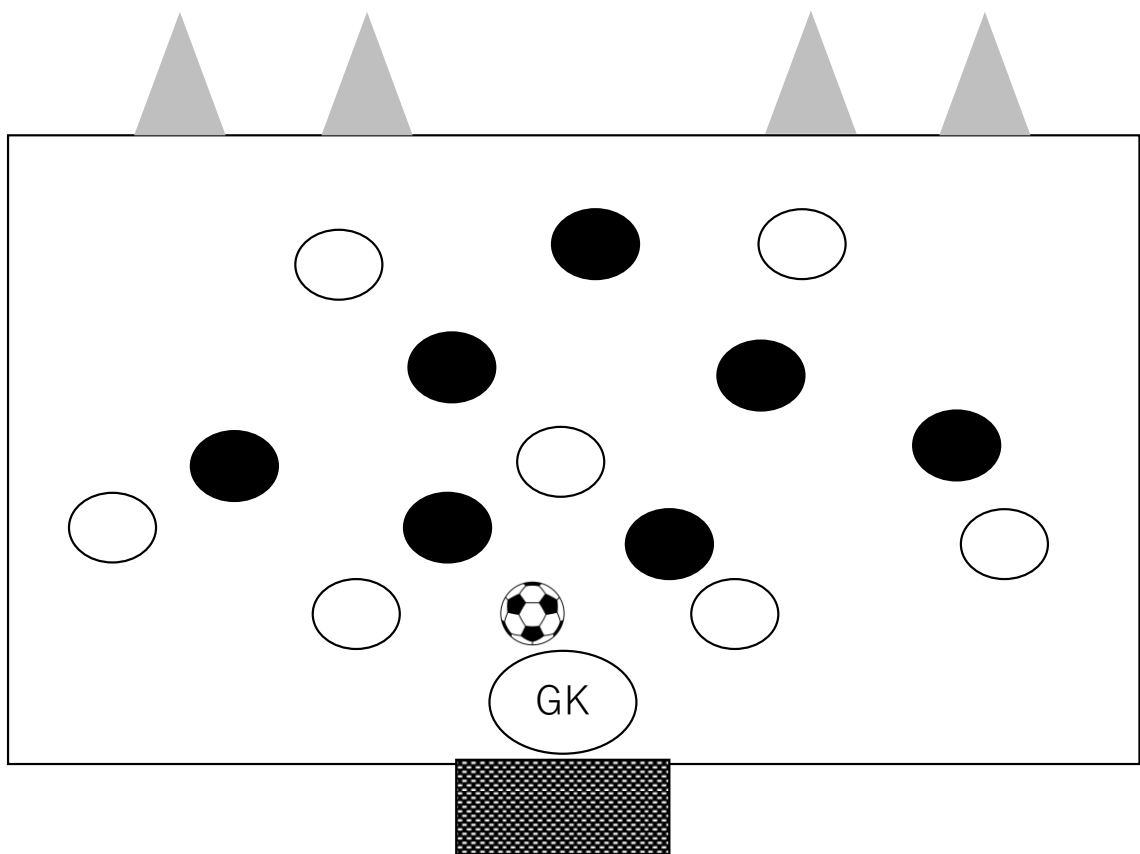


図 15 GKを含めた8対7のビルドアップのトレーニング

相手のFWはGKにプレッシャーを掛ける。白チームは味方とパスを繋ぎながら2つのカラーコーンのどちらかを目指す。

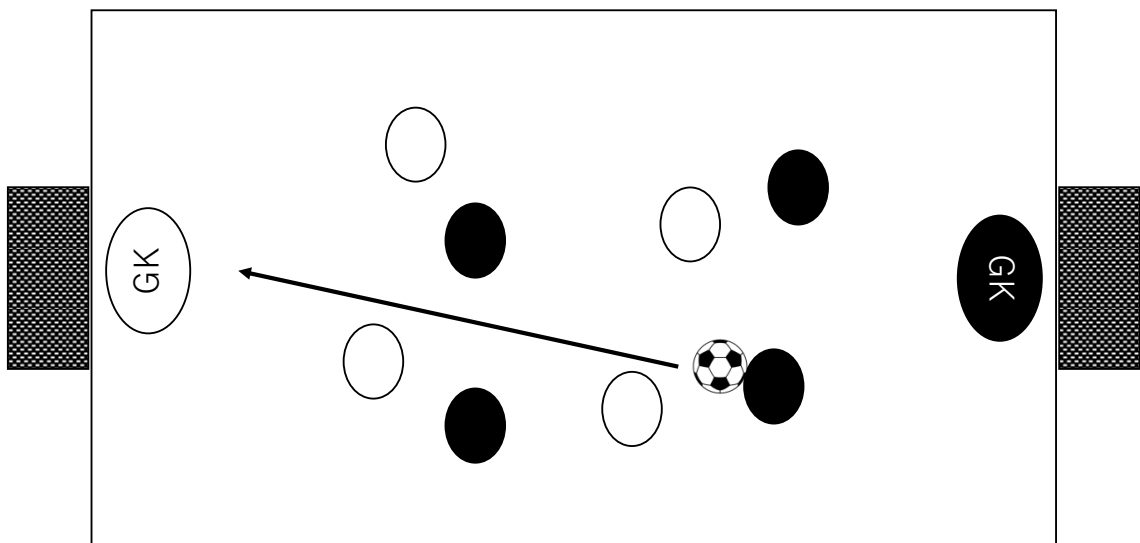


図 16 5対5のシュートゲーム

プレー時間は約2分。時間と空間がない状況の中、味方と連携しビルドアップに関わり、シュートストップ、1対1の場面が多くトレーニングの負荷が高い想定

第3節 本練習メニューの実施対象

第3章で日本の高校生年代のGKの選手において攻撃の起点となるプレーに課題があることを示したように、本章で提示した練習メニューは高校生年代以降のカテゴリーでの使用を想定した。攻撃的な戦術を取るチームであれ、守備的な戦術を取るチームに関係なく最低限取り入れるべき内容であると考え。特に、現代サッカーにおけるGKの役割の変化に伴いGKが習得すべき技術が増えている状況であるが、上記に示した通り練習時間を増やすのではなく、高強度のトレーニングをベースにしながら新たなスキルを習得するような練習メニューの組み立て方が重要であると考え。

第4節 ジュニア年代の取り組み

ジュニア年代ではゴールを守る技術よりもフィールドプレイヤーと同様の足元の技術を獲得することを重視し、ジュニアユースではGK特有の技術習得、基本動作の獲得、ユースでは戦術理解、フィジカル強化といった段階的な技術の獲得ができるような環境の提供や指導を行うことが望ましいと考える。GKは他のポジションの選手と異なり専門化が遅い種目とも言える。W杯で優勝メンバーのGKであるフィジョール氏が中学までボランチの選手であったように、フィールドプレイヤーを経験した選手がGKで将来活躍できる可能性が、GKの役割が変化した現代サッカーにおいてはより高まることが予想される。

第5節 本研究の限界

本研究で各国の育成年代の考え方までは把握できたが、育成段階に応じたトレーニングメニューといった具体的な内容までは明らかにできていない。また、本研究で提示した練習メニューは一案であり、現場での実践を通じて今後、改善を行う必要がある。

第9章 結論

現代サッカーにおいては GK の役割が大きく変化し、練習すべき内容も増加しており、世界の強豪国ではクラブ単位でトップから育成年代まで新しい練習内容が落とし込まれていた。世界のトレンドに遅れないためにも、トップから育成年代に至るまで新たなトレーニング内容の導入が必要であり、その一例として新たな練習方法を提示した。

謝辞

本論文の執筆にあたり、指導教官である平田竹男先生をはじめ、中村好男先生、児玉ゆう子先生、畔蒜洋平先生にはこの一年間大変お世話になりました。

アカデミックな世界を初めて経験し、右往左往する私に常に的確なアドバイスをいただけたこと、心より感謝申し上げます。修士論文の構想からデータ収集、執筆に至るプロセスは当初自分が考えていたものよりもとても困難な道でしたが、ご指導いただいた先生方のおかげで、無事ゴールにたどり着くことができました。

また、サッカー一筋で生きてきた私にこのような学びのきっかけを与えていただいた清水商業高校サッカー部時代の恩師、大滝雅良先生にあらためて感謝いたします。

そして、インタビューにご協力いただいた世界各国の GK コーチの方々、そして通訳として彼らと繋いでくれた勝部哲也さん、高司裕也さん、本当にありがとうございました。

皆様のおかげでこの論文をなんとか書き上げることができました。

最後に、この一年間私を精神的に支えてくれた妻、子供達。あなたたちの存在が私をずっと勇気づけてくれました。本当にありがとう。

参考文献

- ・ Goal Keeping, FIFA,
[https://www.ksi.is/library/Skrar/Fraedsla/FIFA%20Goalkeeping%20-%20b%C3%B3k%20\(pdf\).pdf](https://www.ksi.is/library/Skrar/Fraedsla/FIFA%20Goalkeeping%20-%20b%C3%B3k%20(pdf).pdf) (2023 年 1 月 6 日最終閲覧)
- ・ 末永尚、吉村雅文、小坪昭仁；Goalkeeping Distribution Analysis、順天堂大学スポーツ健康科学研究、順天堂大学、140-147, 2001-03.
- ・ Pilar Sainz De Baranda, Enrique Ortega and José M. Palao；Analysis of goalkeepers' defence in the World Cup in Korea and Japan in 2002, European Journal of Sport Science, Volume 8, Pages 127-134, 2008.
- ・ Pilar Sainz de Baranda, Laura Adán, Antonio García-Angulo, Maite Gómez-López; Differences in the Offensive and Defensive Actions of the Goalkeepers at Women's FIFA World Cup 2011, Movement Science and Sport Psychology, Volume 10 – 2019.
- ・ Fabian W. Otte, Sarah-Kate Millar, Stefanie Klatt; How does the modern football goalkeeper train? – An exploration of expert goalkeeper coaches' skill training approaches, Journal of Sports Sciences, Volume 38, Pages 1465-1473, 2020.
- ・ Masters, R.S.W., van der Kamp, J., & Jackson, R.C.；Imperceptibly off-center goalkeepers influence penalty-kick direction in soccer, Psychological Science, 18, 222-223, 2007.
- ・ Horn, Michael；Quantitative analysis of in-match penalty kicks from 2009/10 to 2018/19 in the English Premier League, Stellenbosch University, 2020.
- ・ 「第 100 回全国高校サッカー選手権大会テクニカルレポート」、日本サッカー協会、2021 年
- ・ 「ナショナル・フットボール・フィロソフィーとしての Japan's Way 第 1 版」、2022
- ・ 「第 45 回日本クラブユース選手権(U-18)、令和 3 年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会・男子 TSG 報告」、日本サッカー協会、2021 年「JFA テクニカルニュース 44 号」、日本サッカー協会、2006 年
- ・ レナート・バルディ、片野道郎；モダンサッカーの教科書, ソル・メディア, 2018 年 6 月 4 日
- ・ レナート・バルディ、片野道郎；モダンサッカーの教科書 II, ソル・メディア, 2020 年 7 月 29 日
- ・ レナート・バルディ、片野道郎；モダンサッカーの教科書 III, ソル・メディア, 2021 年 1 月 25 日
- ・ 林舞輝；「サッカー」とは何か 戦術的ピリオダイゼーション vs バルセロナ構造主義、欧州最先端をリードする二大トレーニング理論, ソル・メディア, 2020 年 8 月 7 日

- ・ 「ゴールキック・ルール改正の影響はすでに出始めている」；Footballista, 2019 年 11 月 19 日, <https://www.footballista.jp/special/76516>, (2022 年 2 月 6 日最終閲覧)
- ・ 「ゴールキック・ルール改正の影響はすでに出始めている」；Footballista, 2019 年 11 月 19 日, <https://www.footballista.jp/special/76516>, (2022 年 2 月 6 日最終閲覧)
- ・ 「ゴールキック・ルール改正の影響はすでに出始めている」；Footballista, 2019 年 11 月 19 日, <https://www.footballista.jp/special/76516>, (2022 年 2 月 6 日最終閲覧)
- ・ 「Everson Felipe Marques Pires Statistics and Player Profile」 Everson Statistics - Goals, Passes & Shots etc , Infogol
- ・ <https://www.infogol.net/en/player/everson/19070> (2022 年 7 月 15 日最終閲覧)
- ・ Ray Power ; *Making the Ball Roll: A complete guide to youth football for aspiring*
- ・ soccer coach, Bennion Kearny Limited, May 1, 2014.
- ・ Xavier Tamarit ; What is Tactical Periodization? Samaniego, I. and Fernandez, C. (trans.), Bennion Kearny Limited, April 12, 2015